

業務実績書

研No.57

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備((1)－①)		
【事業概要】 文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図り、システム面から文化財に関する専門的アーカイブの拡充、データベースの充実を支援する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】 田中淳（部長）、山梨絵美子（副部長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、城野誠治（専門職員）、中村明子（アソシエイトフェロー）、井上さやか（アソシエイトフェロー）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、小山田智寛（研究補佐員）、高橋佑太（研究補佐員） 広報委員（LAN 担当）： 川野邊渉（文化遺産国際協力センター長） 各部センターLAN 担当：高砂健介（研究支援推進部管理室長）、綿田稔（企画情報部文化財アーカイブズ研究室長）、飯島満（無形文化遺産部音声・映像記録研究室長）、吉田直人（保存修復科学センター主任研究員）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター主任研究員）			
【主な成果】 保守期限切れを迎えるネットワーク機器の更新を実施した。また、インターネット接続について、従来の専用線から公衆回線での接続に変更した。さらに、所外からのグループウェア閲覧の利便性を図るため、VPN 接続についてタブレット端末からの閲覧を可能にするソフトウェアを導入した。			
【年度実績概要】 ネットワーク機器の更新 ・平成 25 年度にハードウェア保守の期限が切れるネットワーク機器を更新した。具体的には所内から所外、所外から所内への情報のアクセスを制御するファイアウォールである。 ・平成 25 年 11 月、インターネット接続のために研究機関等で共同利用している SINET の接続先を従来の東京大学ノードから東京データセンターに変更するのに伴い、これまで専用線で接続していたのを公衆回線（フレッツ光）に変更した。その際、VPN 接続を行うことで、セキュリティは確保している。このことにより、利用料の低減を実現するとともに、接続速度は従来通りもしくは向上した。 ・職員が使用しているコンピュータ用のウィルス駆除ソフトウェアについて、Kaspersky Anti-Virus 及び ESET NOD32 の 2 種類のソフトウェアのライセンスを、それぞれ所内で使用されているコンピュータ台数の半数分ずつ購入し、全てのコンピュータが一斉に同一の不具合を引き起こさないよう工夫している。これらのライセンスについて、平成 25 年 6 月から 7 月にかけて更新し、最新のウィルス定義ファイルによる職員のコンピュータの保護を図った。			
ネットワーク機器の新設 ・平成 25 年 9 月に、所外からのノート PC やタブレット端末等でのグループウェア（ガルーン）閲覧のため、VPN 接続のための専用ソフトウェアを導入した。			
【実績値】 サーバ更新 1 件（ファイアウォール） 接続回線変更 1 件 システム新規導入 1 件（タブレット端末による VPN 接続ソフトウェア 1 件）			
【備考】			

自己点検評価調査

研No.57

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：適切な時期に機器及びシステムを更新することができた。 効率性：インターネット接続を公衆回線に変更することで、利用費を大きく削減した。 継続性：継続的にネットワークシステムを運用することができた。						

2. 定量的評価

観点	サーバ更新	接続回線変更	システム新規導入			
判定	A	A	A			
判定理由 サーバ更新：当初の予定通り実施することができた。 接続回線変更：利用料の低減化と接続速度の向上をもたらす変更を、実施することができた。 システム新規導入：VPN 接続のための専用ソフトウェアの導入は、節約の結果前倒しで実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	情報システムの整備については、ネットワーク環境の更新やインターネット接続方法の変更に伴い、セキュリティの強化及び高速化、費用の縮減が図られた結果、適時性、効率性、継続性が向上したと判断した。次年度以降も、ネットワークの安定運用と効率化、利便性の向上を図るとともに、整備した環境にさらに情報発信のためのサーバを導入することで、蓄積した文化財調査研究情報の公開のための環境を整備する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	情報システムの整備については、セキュリティの強化及び接続速度の高速化を図るに当たり、利便性を保ったうえでより効率的な運用ができるよう、ネットワーク環境の段階的な更新をさらに進めた。次年度は、更新予定の機器はないが、Wordpress や e コミによる各種データベースの公開のため、サーバの導入を予定している。現有のスタッフの能力を最大限に活用し、ユーザの意見を適宜取り入れて費用対効果の高い機器の導入とその安定的な運用に努めるとともに、保守内容をさらに見直すなど費用の削減を図る。

業務実績書

研No.58

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化((1)－①)		
【事業概要】 無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。第1期中期計画（平成17年度終了）の事業案策定後の購入・寄贈にかかるアナログ資料を中心に、これまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、デジタル化を済ませた音声資料は、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には資料のデータベース公開と音声・画像等の配信を目指すものである。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	副所長（部長兼務） 石崎武志
【スタッフ】 高桑いづみ（無形文化財研究室長）、飯島満（音声・映像記録研究室長）、久保田裕道（主任研究員）、今石みぎわ（研究員）、菊池理予（研究員）、佐野真規（研究補佐員）、橋本かおる（研究補佐員）			
【主な成果】 本年度より、旧芸能部の時代に作成された映像資料の媒体変換に着手した。画像資料に関しては、既に所蔵を公開している写真資料のデジタル化を行った。アナログ音声資料の内、オープンリールとカセットテープに関しては、収録内容の確認を含めた整理を行った。			
【年度実績概要】 旧芸能部所蔵資料の内、8ミリフィルム（モノクロ）3本、8ミリフィルム（カラー）1本、16ミリ（モノクロ）2本の媒体変換を行い、HDCAM6本を作成した。音声記録のデジタル化は、前年度に引き続き、1960年代に放送された邦楽関連のテープ録音を中心に収録内容を確認し、インデックス付与済みCDを21枚作成した。カセットテープに関しては、旧芸能部所蔵テープの内、寺事の現地録音を中心に内容確認を行った。画像資料の媒体変換に関しては、モノクロネガフィルムを中心にデジタル化に着手し、今年度は石井雅子撮影歌舞伎舞台写真1,947枚の媒体変換を行った。 この他、無形文化遺産関連の映像資料365枚（作成DVD218枚・作成BD147枚）を登録した。			
			
媒体転換した映像資料の静止画（1978年「イザイホー」の記録）			
【実績値】 CD（音声資料） 21枚 HDD（画像資料） 1台（1,947枚） DVD・BD（映像資料） 365枚 HDCAM（映像資料） 6本			
【備考】			

自己点検評価調査

研No.58

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性	発展性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：映像資料について経年劣化が進行する前に媒体変換に着手することができた。 独創性：他の公的機関では所蔵されていない資料の恒久的な利用に向け、処理を行っている。 継続性：アナログ資料の継続的な媒体変換とともに、資料整理も着実に進めている。 発展性：将来の資料公開に備え、資料の蓄積に努めている。						

2. 定量的評価

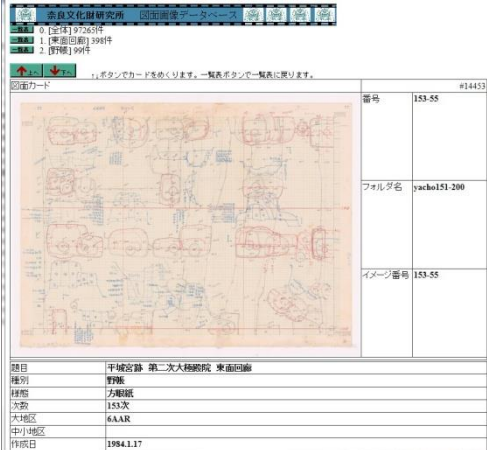
観点	CD (音声資料)	HDD (画像資料)	DVD・BD (映像資料)	HDCAM (映像資料)		
判定	A	A	A	A		
判定理由 CD（音声資料）・HDD（画像資料）・DVD・BD（映像資料）： これまで集積してきたものを補完するような資料の整理が進められており、より充実した無形文化遺産アーカイブを構築することができた。 HDCAM（映像資料）：本年度から本格的に着手したものであり、今後とも順調な作業水準を期待できる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定量的評価、定量的評価ともに、これまでの水準を維持していることに加え、映像資料（8ミリ・16ミリフィルム）の媒体変換についても本格的な事業を展開している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	事業は、従来水準を維持している。また、将来的なデータベース公開へ向け、資料作成を着実に進めている。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実((1)－①)		
【事業概要】 文化財情報の特性について具体的な資料の研究に基づいて検討を加え、それに最も適した電子化・情報化の方法を探り実際のデータベース入力を進める。			
【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山 洋
【スタッフ】 森本 晋（文化財情報研究室長）			
【主な成果】 文化財情報電子化の研究を通じて、GISを活用した文化遺産情報の取得・分析に関する最新の手法を開発するとともに、研究成果を学会で発表している。開発・改良を継続している各種データベースについて、業務用とともに公開用についても、記載方法の標準化を進めながらデータの充実を図ると共に、新規データベースとして考古関連雑誌論文情報補完データベースを構築し、公開の準備を行った。			
【年度実績概要】 - 文化財情報電子化の研究として、GIS（地理情報システム）の技術を活用した考古情報の分析に関する調査研究を行い、成果を地理情報システム学会で発表した。資料調査として関連学会の中でも重要な地球惑星科学連合と文化遺産記述国際委員会（CIPA）に参加した。 - 文化財情報データベースの充実として、従来より進めている遺跡、写真、報告書抄録、航空写真、図面画像等のデータベースについてデータの入力・更新を行った。 - 新規データベースとして、考古関連雑誌の内で、インターネット上に情報が提供されていない論文に関するデータベースを作成し、考古関連雑誌論文情報補完データベースとして公開の準備を行った。			
			
図面画像データベースの詳細表示			
【実績値】 研究発表件数 1件（①）			
（参考値） データベース件数 平成25年末 ただし（ ）内は平成24年度末の値 全文 213,535 (212,709)、木簡 155,121 (151,098)、抄録 78,725 (74,755)、写真 448,922 (402,732)、遺跡 478,763 (477,822)、航空写真 1,353,481 (1,334,996)、図面画像 97,265 (71,081)、考古関連雑誌論文情報補完 36,428			
【備考】 研究発表 ① 尾吉章・碓井照子・森本晋・清水啓治・藤本悠・清野陽一・玉置三紀夫「遺構情報モデルにおける不確かな時間属性の取り扱いについて」『日本地理情報システム学会第22会研究発表大会予稿集』2013.10.27			

自己点検評価調査

研No.59

1. 定性的評価

観点	適時性	正確性	独創性	継続性	発展性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性:刊行後間もない発掘調査報告書の記述も参照してデータ入力を行っており、十分に成果が認められた。 正確性:データ入力に際し、典拠資料や関連文献の調査を行っており、正確性を十分に担保できた。 独創性:当研究所独自のデータベースを開発・整備して研究に資するとともに、公開用データベースを充実させており、独創性は十分に成果が認められた。 継続性:各種データベースを最新情報に更新しながら、広く継続的に公開提供しており、十分に成果が認められた。 発展性:新規のデータベース開発を図るなど、今後の展開が確実で、十分に成果が認められた。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数					
判定	A					
判定理由 研究発表件数:継続的に研究を行い、早期に成果を公表しているので目標を達成している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業は、適時性・正確性・独創性・継続性・発展性のいずれの観点においても、目標とするレベルに到達しているので、Aと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	それぞれのデータベースにおいて、入力データの充実は滞ることなく進んでいる。また、新規データベースの公開の準備も行うことができた。全体として当初計画通りに進捗しており、順調と判定した。

業務実績書

研 No. 60

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	被災文化財関連情報に関するデータの蓄積・分析及び情報発信((1)－②)		
【事業概要】 被災文化財関連情報に関するデータベースの充実とアーカイブ機能の更新と拡張を図る。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】 田中淳（部長）、山梨絵美子（副部長）、小山田智寛（研究補佐員） 文化財レスキュー旧事務局・日報担当： 岡田健（保存修復科学センター長）、皿井舞（企画情報部主任研究員）、久保田裕道（無形文化遺産部主任研究員）、菊池理予（研究員）、今石みぎわ（研究員）、森井順之（保存修復科学センター主任研究員）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）			
【主な成果】 平成 23 年度・24 年度に文化庁の委託により東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会事務局を運営し、また活動そのものにも携わった文化財レスキュー事業に関する情報を、同委員会の付託により収集・整理し、ウェブで公開した。			
【年度実績概要】 (1) ウェブサイトでの報告書の公開 東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会が作成した報告書 3 件（『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成 23 年度活動報告』、『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成 24 年度活動報告』、『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会公開討論会報告』）について、ウェブサイトで公開した。公開にあたっては、単に各報告書の PDF ファイルを掲載するのではなく、目次を HTML ファイルで作成し、章ごとに PDF ファイルを分割することで、目的の情報を探しやすくするとともにウェブでの閲覧を容易にするよう工夫した。 (2) ウェブサイトでのその他の活動内容の公開 上記の報告書のうち、2 年間の活動に関する年表と活動場所を示す地図については別途サイトを作成し、ウェブでの閲覧に最適化した。地図については、Zoomify(ブラウザ上で超高分解度の画像を拡大・縮小表示させることのできる FLASH を作成できるソフトウェア)により PC で閲覧した場合、画面上で自由に拡大・縮小することを可能にした。 (3) 英語による情報発信 (2)の情報は英訳してウェブサイトに掲載した。また、文化財レスキュー活動についての英語によるまとめを掲載した。(Rescue Efforts for Cultural Properties Affected by the Great East Japan Earthquake Disasters) (4) 日報データベースの整理、写真のデータベース化の検討 データベース化した日報の分析、現場や文化財の写真の整理方法について検討を行った。			
【実績値】 論文数 : 1 件 発表件数: 4 件ウェブコンテンツ (①～④) ウェブサイトで公開した報告書の件数: 3 件 (⑤～⑦)			
【備考】 論文: Rescue Efforts for Cultural Properties Affected by the Great East Japan Earthquake Disasters 2014. 1 発表: ①活動報告書（平成 23 年度、24 年度）、②公開討論会報告書、③2 年間の活動（年表）④活動場所（地図） ウェブサイトで公開した報告書： ⑤『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成 23 年度活動報告』 ⑥『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成 24 年度活動報告』 ⑦『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会公開討論会報告』			

自己点検評価調査

研 No. 60

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：速やかに情報の更新を行うことができた。 独創性：東京文化財研究所が事務局を担当し、集約した文化財レスキューに関する情報を公開することができた。 発展性：災害発生時の緊急対応である文化財レスキューに関する情報を分析・公開することにより、文化財レスキュー自体について総括するだけでなく、次の災害への備えの検討のための資料とすることができる。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	ウェブサイトで公開した報告書の件数			
判定	A	A	A			
判定理由 論文数・発表件数：論文数、発表件数ともに、予定通り公表することができた。 ウェブサイトで公開した報告書の件数： 被災文化財等救援委員会が発行した3冊全ての報告書をウェブサイト上に掲載することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ウェブサイトの運用については、適時性、独創性、発展性が認められた。したがって実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昨年度まで実施した文化財レスキューに関する活動に関する資料をまとめ、公開することができた。次年度以降も、資料の蓄積、分析を行ったうえで、今後の文化財防災計画の立案に資する資料を配布、ウェブでの公開により関係者による活用を促していく予定である。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	専門的アーカイブの充実（資料閲覧室運営）（(1)－③）		
【事業概要】 文化財関連資料の公開機関としての周知の広がりを踏まえ、①受け入れた文化財関連の図書などの文字資料や、作成したアナログ・デジタル画像資料の登録管理、②閲覧室で月・水・金の週 3 回の一般利用者へ所蔵資料の提供、③データベースの作成、検索システムの構築・ウェブサイト上での諸情報の提供を通常業務とするとともに、提供する資料や情報の質に主眼を置き、より専門性の高い文化財関連資料や情報の収集・構築・公開の場として専門的アーカイブの充実を図る。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長 綿田稔
【スタッフ】 田中淳（部長）、山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、吉田千鶴子（客員研究員、東京芸術大学非常勤講師）、城野誠治（専門職員）、井上さやか（アソシエイトフェロー）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、中村明子（アソシエイトフェロー）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、飯島満（無形文化遺産部音声・映像記録研究室長）、佐野千絵（保存修復科学センター保存科学研究室長）			
【主な成果】 資料閲覧室の運営、ならびに資料の登録と情報のデータベース化、またそれを利用した外部公開用 SQL データの更新・運用を行った。			
【年度実績概要】 ・資料閲覧室を公開運営した（合計139日、利用者数のべ977人）。 ・資料の登録と情報のデータベース化を継続した。 ・断片化しがちな情報登録システムの整理統合に着手し、数種あった文献データベースを整理統合した。 ・情報を外部公開データベースに登録し、基礎情報を一般に提供した。 ・外部公開のインターフェイスを一新し、従来の文献データベースを統合した「文化財関係文献データベース（統合試行版）の運用を開始した。 ・引き続き関係各部署の協力を得て貴重書のデジタル化を進めた。 ・セインズベリー日本藝術研究所と共同で「日本芸術研究の基盤形成のため事業」を開始した。			
 セインズベリー日本藝術研究所との協約書締結式の様子 （25年7月25日、イギリス・ノリッジにて）			
【実績値】 研究協議会の開催 4回 資料受入数：和漢書2,645件、洋書142件、展覧会図録・報告書等2,146件、雑誌943件（合計5,876件） データベースの公開件数：1件（新規公開、既存の15件データベースを統合したもの。内部運用34件） 閲覧室利用状況：公開日総数139日・利用者年間合計977人			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6131

自己点検評価調査

研No.61

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性	独創性	効率性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：資料閲覧室の公共性と特徴に則った運営をすることができた。 発展性：汎用性のある情報を自前でデータベース化し、国外との連携も模索している。 継続性：研究基盤の形成を重視し、中長期的視野に立って業務を遂行している。 正確性：文化財専門機関としてより正確な情報提供を実践している。 独創性：東京文化財研究所の業務に密着した、特徴あるデータ整理を行なっている。 効率性：細分化されたデータベースの統合を目指すことで、効率化を図っている。						

2. 定量的評価

観点	研究協議会の開催数	資料受入数	データベースの公開件数	閲覧室利用者数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 研究協議会の開催数：目標値に達した 資料受入数：漢書 2,645 件、洋書 142 件、展覧会図録・報告書等 2,146 件、雑誌 943 件（合計 5,876 件） データベースの公開件数：1 件（新規公開、既存の 15 件データベースを統合したもの。内部運用 34 件） 閲覧室利用状況：公開日総数 139 日・利用者年間合計 977 人 いずれも十分なものと判断する。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	実施計画に沿って遂行することができた。セインズベリー日本藝術研究所との協力関係についても協約書を交わして実行段階に移すことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	次年度以降も、より質の高い専門的文化財アーカイブの充実を目指していきたい。

業務実績書

研No.62

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供((1)－③)		
【事業概要】 文化財に関する資料・図書を計画的に収集・整理し、外部の研究者及び一般の利用者に積極的に公開・提供するための方策を検討し、実施する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中 康成
【スタッフ】 渡 勝弥(文化財情報係長)、伊藤久美、山内章子、中西晶子、堀内千嘉、井上江理奈、永岡美和、太田淳士(以上、連携推進課事務補佐員)			
【主な成果】 遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物の購入および寄贈による収集を行い、整理された資料をデータベースに蓄積してインターネットに公開した。 また、移転に伴い、図書の配列を見直すことによって所在をより明らかにした。			
【年度実績概要】 ・図書等の収集・整理： 遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心とする資料の収集・整理を行った。 また、国立情報学研究所が構築しているオンライン共同分担目録方式による全国規模の総合目録データベース(NACSIS-CAT)への新規及び遡及入力の継続等、所外の利用者への情報提供を行った。 図書資料以外では、発掘調査関係の遺跡、建造物、庭園等の写真の収集、整理を行った。 移転に伴い、大型図書と一般図書を分別することによって、図書の所在をより明らかにした。 ・利用者サービス： 歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物等を一般公開施設として広く利用に供し、遠隔地からの図書利用については、国立情報学研究所が行っている NACSIS-ILL を通じて文献複写・現物貸借サービスを行った。			
			
仮設庁舎閲覧室			
【実績値】 (参考値) 受入数： 購入図書 985 冊 寄贈図書 6,814 冊 雑誌 1,386 タイトル 写真 9,892 点 利用者サービス： 一般利用者数 421 人 利用冊数 3,186 冊 来館者複写件数 1,239 件 遠隔利用： 複写受付件数 623 件 貸借貸出冊数 119 冊			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6132

自己点検評価調査

研No.62

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：要求のあった図書資料等を積極的に収集・整理・公開を行った。 継続性：図書資料等の収集・整理・公開を滞ることなく遂行した。 正確性：移転時において分散配置されていた資料を集中管理することが可能となった。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
判定理由						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	資料の収集・整理・公開を滞りなく実施することができた。また、利用者サービスも適切に行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	発掘調査報告書をはじめ、文化財に関する図書等を広く受け入れることができていることから、順調に実施されたと判断する。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（年報、概要、ニュース）（(2)－①）		
【事業概要】 本プロジェクトは研究所の業務に関する情報発信のうち特に紙媒体である『年報』『概要』『ニュース』、及び不定期に作成するパンフレットなどの編集・刊行を実施する。また、エントランスにおけるパネル展示などを通じて、来訪者に対しても研究所の活動をわかりやすく伝えることを目指す。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】 田中淳（部長）、山梨絵美子（副部長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、城野誠治（専門職員）、中村明子（アソシエイトフェロー）、井上さやか（アソシエイトフェロー）、橋川英規（アソシエイトフェロー）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、小山田智寛（研究補佐員）、高橋佑太（研究補佐員） 広報委員（概要）：岡田健（保存修復科学センター長） 各部門概要担当：安孫子卓史（前研究支援推進部管理室企画渉外係員）、今城裕香（研究支援推進部管理室企画渉外係員）、塩谷純（企画情報部近・現代視覚芸術研究室長）、高桑いづみ（無形文化遺産部無形文化財研究室長）、今石みぎわ（研究員）、佐藤嘉則（保存修復科学センター研究員）、友田正彦（文化遺産国際協力センター保存計画研究室長） 広報委員（年報）：田中淳（企画情報部長） 各部門年報担当：平出秀文（研究支援推進部管理室総務係長）、安孫子卓史（前研究支援推進部管理室企画渉外係員）、今城裕香（研究支援推進部管理室企画渉外係員）皿井舞（企画情報部主任研究員）、高桑いづみ（無形文化遺産部無形文化財研究室長）、森井順之（保存修復科学センター主任研究員）、山内和也（文化遺産国際協力センター地域環境研究室長） 広報委員（東文研ニュース）：山梨絵美子（企画情報部副部長）、安孫子卓史（前研究支援推進部管理室企画渉外係員）、今城裕香（研究支援推進部管理室企画渉外係員）、津田徹英（企画情報部文化形成研究室長）、菊池理予（無形文化遺産部研究員）、北野信彦（保存修復科学センター主任研究員）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）			
【主な成果】 年報 2012 年度版、概要 2013 年度版を編集、発行した。また、『東文研ニュース』を年 2 回、『東文研ニュースダイジェスト』（英語）を年 1 回発行した。			
【年度実績概要】 ・『年報』2012 年度版の刊行 2013 年 5 月 31 日付で年報を刊行した。2012 年度版の構成は従来通り、機構、年度計画及びプロジェクト報告、その他の研究活動、個人の研究業績、研究交流、主な所蔵資料、研究所関係資料、東京文化財研究所プロジェクト索引とした。発行にあたっては、各部・センターの年報担当者が原稿のとりまとめを行った。 ・『概要』2013 年度版の刊行 『概要』2013 年度版を刊行した。各ページの構成の決定や原稿のとりまとめについては、各部・センターの概要担当者が行った。 ・『東文研ニュース』の刊行 『東文研ニュース』を年 2 回発行した。基本的には、ウェブサイトに掲載した活動報告から四半期ごとの記事を掲載しているが、掲載する記事は各部・センターで選択している。ページ数は固定せず原稿の多寡によって自由に構成し、記事の配置については会議や研究会と現地調査とがバランスよく並ぶようにして見た目の印象にも配慮した。この他、東文研ニュースには、特定のトピックについてまとめた紹介を行うコラムや刊行物の案内、人事異動などを掲載している。なお、54 号から英語版と統合し、日本語・英語併記とした。 『東文研ニュース』の英語版である『Tobunken News Digest』を年 1 回発行し、外国への情報発信にも努めた。 ・エントランスロビーパネル展示の実施 エントランスロビーに研究成果を伝えるためのパネルを作成し、展示した。25 年度は昨年度予算で作成した企画情報部による横山大観「山路」に関するパネル展示を行い、25 年度末に文化遺産国際研究センターによる「海外にある日本美術作品の修復事業」（仮題）に関するパネルを作成し、展示準備をすすめた。			
【実績値】 刊行数 『東京文化財研究所年報』2012 年度版 800 部 『東京文化財研究所概要』2013 年度版 3,500 部 『東文研ニュース』53 号 1,000 部 54 号 2,500 部 『東文研ニュースダイジェスト』第 13 号 3,500 部			
【備考】			

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
適時性：東文研ニュースについて、編集担当を研究支援推進部に移行するとともに、和英併記とするなどの紙面の刷新を図ることができ、海外発信力を強化することができた。 効率性：編集費用についてはできるだけ内製化することで予算削減に努めた。 継続性：継続的に刊行物を作成した。 正確性：概要・年報については十全な校正をそれぞれ実施することで、情報の正確性を維持した。						

2. 定量的評価

観点	刊行数					
判定	A					
判定理由 刊行数：ウェブサイトに掲載するとともに刊行物を発行した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	『東文研ニュース』に『Tobunken News Digest』を統合し、和英併記の新たな『東文研ニュース』とすることで、効率的、効果的な情報発信の媒体としての活用を目指した。また、年報・概要に関しては、各部・センター担当者が入稿前の原稿を整えるなど役割分担を明確化したことにより、早期の発行を行うことができた。ただし、『東文研ニュース』の統合にあたって内容やレイアウトの検討・合意形成に時間を要したが、次年度以降につながるかたちをつくることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	概要、年報の発行を順調に実施することができた。東文研ニュースについては発行回数が昨年度よりも減少したが、編集担当を研究支援推進部に移行し、和英併記にするなど紙面を刷新することで情報発信の効率化を図ることができたので、次年度には順調に発行できると考える。次年度以降も、これらの媒体による情報発信を継続するとともに、より効果的な情報発信の方法について検討し、ウェブサイトその他インターネットによる情報発信との連携にも努める。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（『平成 24 年版日本美術年鑑』、『美術研究』）（(2)－①）		
【事業概要】 各年の美術活動と美術研究、批評の状況を記録するために、昭和 11 年以来刊行を続けている『日本美術年鑑』を年 1 冊刊行するとともに、昭和 7 年 1 月以来、日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術等に関わる研究論文・図版解説・書評、展覧会評、研究資料、研究ノート等を掲載する『美術研究』を年 3 冊刊行する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 塩谷純
【スタッフ】 田中淳（部長）、山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）、中野照男（客員研究員、大東文化大学非常勤講師）、三上豊（客員研究員、和光大学教授）、近松鴻二（客員研究員、国土舘大学非常勤講師）、吉田千鶴子（客員研究員、東京藝術大学非常勤講師）			
【主な成果】 本年度は、『平成 24 年版 日本美術年鑑』及び『美術研究』410～412 号を刊行した。			
【年度実績概要】 ①『平成 24 年版 日本美術年鑑』 B5 版(2014. 3) 2011（平成 23）年美術界年史、美術展覧会（企画展、作家展、団体展）、美術文献目録（定期刊行物所載文献、美術展覧会図録所載文献（企画展、作家展））、物故者 ②『美術研究』410 号（2013. 9） ・李清泉（西林孝浩訳）「空間論理と視覚意味― 宋遼金墓「婦人啓門」図新論（上）」 ・田中伝「吉川霊華筆《離騷》の主題と典拠」 ・大谷省吾「鬘光《眼のある風景》をめぐって（上）」 ・綿田稔「研究資料 国立ギメ東洋美術館蔵 大政威徳天縁起絵巻―解題―」 ・綿田稔・土屋貴裕・大月千冬・佐藤直子「研究資料 国立ギメ東洋美術館蔵 大政威徳天縁起絵巻―詞書公刊ならびに影印（上）―」 ・企画情報部報 ③『美術研究』411 号（2014. 2） ・李清泉（西林孝浩訳）「空間論理と視覚意味― 宋遼金墓「婦人啓門」図新論（下）」 ・大谷省吾「鬘光《眼のある風景》をめぐって（下）」 ・綿田稔・土屋貴裕・大月千冬・佐藤直子「研究資料 国立ギメ東洋美術館蔵 大政威徳天縁起絵巻― 詞書公刊ならびに影印（中）―」 ・齊藤洋一「研究資料 華族写真同人誌『華影』考―明治末期華族写真愛好家の活動と小川一真・黒田清輝との交流を巡って―」 ④『美術研究』412 号（2014. 3） ・李裕群（森美智代訳）「トルファン・トユク石窟の考古学的新発見―五世紀高昌の仏教図像に関する試論―」 ・鈴木廣之「展覧会評 狩野山楽・山雪」 ・綿田稔・土屋貴裕・大月千冬・佐藤直子「研究資料 国立ギメ東洋美術館蔵 大政威徳天縁起絵巻― 詞書公刊ならびに影印（下）―」 ・田中淳「研究資料 黒田清輝宛小川一真書簡の翻刻と黒田清輝の写真観」 ・岡塚章子「明治期の写真団体と華族―小川一真の事績からの考察―」 ・岡塚章子「黒田清輝宛 小川一真書簡 影印・翻刻・解題」 ・美術研究（407 号～412 号）総目次			
【実績値】 刊行数 『平成 24 年版 日本美術年鑑』刊行数 1 点 (①) 『美術研究』刊行数 3 点 (②～④) 配布部数 『平成 24 年版 日本美術年鑑』刊行部数 600 部 配布部数 600 部 (①) 『美術研究』刊行部数 各 400 部 配布部数 各 380 部 (②～④)			
【備考】 ①『平成 24 年版 日本美術年鑑』東京文化財研究所 2014. 3 ②『美術研究』410 号 東京文化財研究所 2013. 9 ③『美術研究』411 号 東京文化財研究所 2014. 2 ④『美術研究』412 号 東京文化財研究所 2014. 3			

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性、発展性： 『美術研究』において、話題となった展覧会「狩野山楽・山雪」を展覧会評として取り上げ、今後の研究動向と展望を示した。また、これまで全容の知られていなかった「国立ギメ東洋美術館蔵 大政威徳天縁起絵巻」全六巻、「黒田清輝宛 小川一真書簡」を影印とともに翻刻・解題を付して「研究資料」として世に紹介した。さらに、『美術研究』海外編集委員によって推薦された韓国語圏と中国語圏で発表された論文を翻訳し掲載することで、広く東アジアにおいてどのような問題が最新のテーマとして文化財研究の俎上にあがっているかを提示した。いずれも適時性・発展性において十分に成果が認められた。 正確性、継続性： 1936（昭和11）年以来刊行を続けている『日本美術年鑑』において、2011年の美術界に関する基礎データの集成に努め、十分に成果が認められた。1932（昭和7）年の創刊以来、日本・東洋の古美術、ならびに日本近代・現代の美術とこれらに関連する西洋美術についての論文・研究ノート・図版解説・展覧会評・研究資料などを掲載する『美術研究』を計画通り年度中に3冊刊行した。						

2. 定量的評価

観点	刊行数	配布部数				
判定	A	A				
判定理由 刊行数：目標を達成した。『日本美術年鑑』については、各関係機関等に600部を配布することができた。 配布部数：目標を達成した。『美術研究』については、各号を関係機関等に380部を配布することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年度計画通り、『美術年鑑』1冊と『美術研究』3冊を刊行した。ことに前者においては、2011（平成23）年美術界年史、美術展覧会、美術文献目録を収録して、遺漏なく斯界の動向の記録に努めるとともに、後者では、論文、翻訳論文、展覧会評、研究資料のそれぞれにおいて国内外の文化財研究に資するべく充実を図った。この点において十分に評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画にあげた実施状況は、順調である。次年度は、『日本美術年鑑』のウェブへのデータ公開の迅速化を図るとともに、同年鑑創刊以前のデータについても補完を目指したい。

業務実績書

研No.65

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（『無形文化遺産部研究報告』、『無形民俗文化財研究協議会報告書』（（2）－①）		
【事業概要】 無形文化遺産部スタッフによる業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』及び民俗文化財保護行政担当者、無形民俗文化財保存関係者、研究者の参加を得て開催する無形民俗文化財研究協議会の事例報告・総合討議を内容とする『無形民俗文化財研究協議会報告書』を刊行する。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	副所長(部長兼務) 石崎武志
【スタッフ】 高桑いづみ（無形文化財研究室長）、飯島満（音声・映像記録研究室長）、久保田裕道（主任研究員）、今石みぎわ（研究員）、菊池理予（研究員）			
【主な成果】 (1) 主として無形文化遺産部研究員の業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』第8号を刊行した。 (2) 平成 25 年 11 月 15 日に開催した無形民俗文化財研究協議会での事例報告・総合討議を内容とする『第 8 回無形民俗文化財研究協議会報告書』を刊行した。			
【年度実績概要】 (1) 『無形文化遺産研究報告』第 8 号を以下の内容で刊行した。 「染織技法の分業に関する研究（一）」菊池理予、「日本における出土鼓胴と古制の鼓胴について」高桑いづみ、「〔資料紹介〕無形文化遺産部収蔵映像フィルムとそのデジタル化」佐野真規、「〔資料紹介〕梅村豊撮影歌舞伎写真（五）」鎌田沙弓、「〔資料紹介〕東京文化財研究所所蔵ニットー長時間レコード」飯島満 (2) 「わざを伝える―伝統とその活用―」をテーマとした『第 8 回無形民俗文化財研究協議会報告書』を以下の内容で刊行した。 趣旨説明 [第 1 部 報告] 「佐渡『小木のたらい舟製作技術』伝承の取り組みと課題」井藤博明 「越中福岡の菅笠保全に妙薬はあるのか―行政のサポートについて」徳田光太郎 「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクトの取り組みについて」羽太謙一 「荒川区の無形文化財保護の取り組み―伝統工芸技術の保存・普及・継承事業を中心として」野尻かおる 「台東区の伝統産業事業について」浦里健太郎 [第 2 部 総合討議] コメント・ディスカッション 参考資料			
【実績値】 刊行数 2 部（『無形文化遺産研究報告』第 8 号、『第 8 回無形民俗文化財研究協議会報告書』）2014. 3			
【備考】			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：報告書に掲載した資料紹介は、東京文化財研究所がこれまでに集積してきた無形文化遺産関連資料の紹介である。 独創性：無形民俗文化財研究協議会で取り上げた「伝統的技術」は、民俗技術に範囲を限定せず、無形文化財の分野である無形文化財選定保存技術等も視野に入れたためであり、こうしたテーマ設定に基づく報告書は、無形の文化財を扱う無形文化遺産部ならではのものといえる。 発展性：一般の認知度が比較的低い民俗技術をテーマに取り上げ、その報告書を刊行したことによって、無形民俗文化財研究協議会が、数少ない民俗技術の継承等の諸問題についての議論の場となることが期待できる。						

2. 定量的評価

観点	刊行数					
判定	A					
判定理由 刊行数：予定通りの刊行数を達成している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	『無形文化遺産研究報告』には、今年度の事業に基づく報告や、これまで継続してきた調査を踏まえた研究成果を掲載することができた。『無形民俗文化財研究協議会報告書』は、「伝統的技術」をテーマとする数少ない報告書（民俗技術を取り上げたのは本協議会でも第1回以来）であり、それだけに有用性も高い。また、関係機関や専門研究者へ配布した後、広範な研究分野からの要請にも資するため、速やかにPDFでの公開もなされてきている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	両誌ともに計画通り年1回の刊行がなされ、目的を順調に達成した。今後もこのペースの維持をめざす。

業務実績書

研No.66

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行(『保存科学』53号)((2)－①)		
【事業概要】 保存修復科学センターと文化遺産国際協力センターで行われた文化財の保存と修復に関する調査や研究に基づく成果のまとめ、公開を目的とし、論文集である「保存科学」を年1回、刊行する。様々な文化財の科学的調査の結果や基礎研究に関する論文・報告、受託研究に関する研究報告や修復処置報告などを掲載する。また、研究成果のさらなる公開を行うために、掲載論文をPDF化して、研究所のウェブサイト上で公開を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 中山俊介(近代文化遺産研究室長)、犬塚将英(主任研究員)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)			
【主な成果】 20件の投稿を受け、外部査読者2名を含む編集委員会を中心に査読を行い、報文4本、報告15本、合計19本の掲載を決定した。総ページ数は244ページとなった。本誌の体裁は昨年度までのものから変更をせず、650部印刷し、関係諸機関に配布した。			
【年度実績概要】 岡田健(保存修復科学センター長)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)、神庭信幸(東京国立博物館文化財保存修復課長)、稲葉政満(東京藝術大学大学院美術研究科教授)の4名から構成される編集委員会によって『保存科学』の編集を行った。平成25年度は、19件の研究論文・報告を掲載した『保存科学』第53号を発行した。その中で4件の研究論文の題目を以下に記す： 1. 仁王胴具足にみられる桃山文化期の一塗装技術――宮市博物館所蔵仁王胴具足を例として―― 2. 装飾古墳のおかれた「環境」と保存の歴史 3. 展示ケース内有機酸の低減対策の評価法 4. 柿(こけら)葺き屋根材中存在する糸状菌の菌叢解析 その他、15件の研究報告を掲載した。			
			
『保存科学』第53号			
【実績値】 印刷部数 650部 掲載論文数 19件			
【備考】 本誌体裁 B5、総ページ数：244ページ			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	S	A
判定理由 適時性：掲載されている論文は文化財の保存・修復に関して現在問題になっていることを取り上げたテーマや新しい研究成果を含んでおり、それらを報告することは適時性に富んでいる。 独創性：個々の論文がそれぞれ特有のテーマに沿ってまとめられた内容であることから独自性・独創性を有している。 発展性：現在問題になっている問題への取り組みや発表された新しい研究成果の応用を検討することにより、新たな課題も明らかになり、さらに研究の発展が期待される。 効率性：外部委員2人も含め、編集委員会は4人の編集委員で構成されており、担当者2名との連携により過不足なく編集作業を効率良く進められた。 継続性：半世紀にわたり文化財保存学を牽引してきた学術研究誌であり、引き続き内外から注目・期待を集めるべく努力している。 正確性：論文を掲載する前に十分な査読を行っていることから、発表した内容の正確性を保証している。						

2. 定量的評価

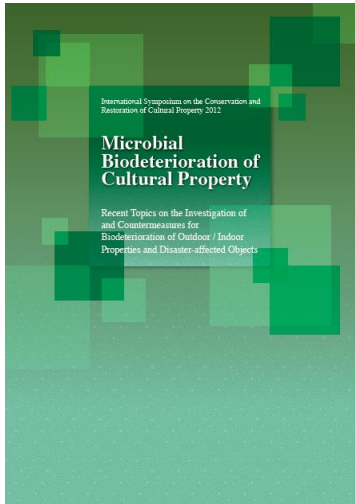
観点	印刷部数	掲載論文数				
判定	A	A				
判定理由 印刷部数：文化財の保存と修復に関する新しい情報を発信するための十分な発行部数（650部）を確保するために印刷を行った。 掲載論文数：文化財の材料分析に関する調査結果、遺跡等屋外にある文化財の調査、文化財を取り巻く環境に関する研究など研究テーマは多岐にわたり、そして豊富な数（19件）の論文を掲載することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新しい研究成果等を発表する論文集であることから、適時性、独創性、発展性、継続性を有している。また、論文を掲載するにあたっては、各論文に査読者を割り当てて十分な審査を行ったことにより、発表内容の正確性も有している。印刷を行い関係各所への配布を行ったが、さらに、掲載論文はPDF化して研究所のウェブサイトからも閲覧可能とし、国内外の研究者、修復技術者にとって重要な情報源としての役割も果たした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通りに、編集作業を進めることができ、『保存科学第53号』を発行することができた。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	第36回文化財の保存と修復に関する国際研究集会プロシーディングスの出版 ((2)-①)
【事業概要】 文化財に関する調査・研究に基づく成果について、国際シンポジウムを開催し、その内容をまとめたプロシーディングスを出版することにより、積極的に情報や成果を公開・提供する。	
【担当部課】	保存修復科学センター
【プロジェクト責任者】	生物科学研究室長 木川りか
【スタッフ】 佐藤嘉則（研究員）、小野寺裕子（研究補佐員）	
【主な成果】 24年12月に開催した第36回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「文化財の微生物劣化とその対策—屋外・屋内環境、及び被災文化財の微生物劣化とその調査・対策に関する最近のトピック—」Microbial Biodeterioration of Cultural Property:Recent Topics on the Investigation of and Countermeasures for Biodeterioration of Outdoor / Indoor Properties and Disaster-affected Cultural Objects の口頭発表15件の内容をまとめた論文と、ポスター発表23件の要旨を収録したプロシーディングスを編集、出版した（26年1月出版）。	
【年度実績概要】 24年12月に開催した国際研究集会の口頭発表の内容をまとめた論文（英文）を発表者から集め、英文校正作業を含む編集作業を実施した。ポスター発表の英文要旨とともに、プロシーディングスを編集、出版した。	
【Contents】 • Overviews of the characteristics and problems of biodeterioration of stone monuments/ objects and recent topics on diagnostic methods for determining deterioration and conservation treatments : Piero Tiano • Investigation on the bio deterioration of cultural properties: Overview, preventive measures and recent topics : Geneviève Oriol • Overview of cultural properties affected by disaster in the Great East Japan Earthquake of March 2011 : Toru Tateishi • Microbial damage of tsunami-affected objects in the Great East Japan Earthquake 2011 and problems with fungicidal fumigation : Rika Kigawa and Yoshinori Sato • Microbial deterioration of tsunami-affected paper-based objects: Yoshinori Sato, Mutsumi Aoki, and Rika Kigawa • Deterioration of stone monuments by epiphytes in relation with environmental factors : Nobuaki Kuchitsu • Method for cleaning epiphytes on stone monuments : Masayuki Morii and Wataru Kawanobe • Sulfur-oxidizing microorganisms isolated from the deteriorated sandstone in Angkor monuments, Cambodia : Yoko Katayama, Xian Shu Li, Asako Kusumi, and Ji-Dong Gu • Microbial deterioration/ degradation of polymers used in conservation and issues with the use of antimicrobial biocides : Ji-Dong Gu • Agents responsible for wood decay in historical monuments: identification, treatment and preventive measures : Faisal Bousta • Investigation of deterioration of wood by various methods including non-destructive methods : Yoshihisa Fujii • Decay inspection of historical wooden architectures by genetic analysis : Tomoaki Sugiyama • Investigation of indoor air-borne microbial particles in cultural asset facilities : Kosuke Takatori, Toru Shimizu, Atsuko Takahashi and Yuko Kumeda • The development of a DNA microarray for the rapid identification of moulds on works of art : Wibke Neugebauer, Dirk M. Leinberger, Karin Petersen, Ulrike Schumacher, Till T. Bachmann and Christoph Krekel • Mould risk to cultural property - on the problem of defining adverse environmental conditions and potential for harm : Tom Strang	
	
第36回文化財の保存と修復に関する国際研究集会プロシーディングス	
【実績値】 プロシーディングス刊行 1件 (①) (参考値) 総ページ数：218 ページ 刊行部数：700 部	
【備考】 ① 『Microbial Biodeterioration of Cultural Property:Recent Topics on the Investigation of and Countermeasures for Biodeterioration of Outdoor / Indoor Properties and Disaster-affected Cultural Objects』 2014.1	

自己点検評価調査

研No.67

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：被災文化財の微生物劣化の現象の調査・対策の策定を含む、文化財の微生物被害対策は、極めて緊急なテーマであり、このテーマの最新の成果を国際研究集会のプロシーディングスとして公開できるため、十分に成果が認められる。 独創性：文化財の生物被害に特化した国際研究集会は珍しく、充実した内容を英文でまとめて提供することができたことは、国内のみならず国外にとっても貴重な資料となり、今後のこの分野の発展に資するものである。 発展性：今回まとめられた内容は、今後現場の文化財の生物被害対策を考えるうえで、極めて応用性が高いと考えられるので、十分に成果が認められる。 効率性：少ないスタッフ数ながら最大限の成果を達成したと考えられるので、十分な成果が認められる。 継続性：国際研究集会のプロシーディングスは開催年度の翌年度に毎年発行されており、国際的に成果を発信するとともに、貴重な研究成果の記録となっている。 正確性：記述内容については、英文校正を含め十分に吟味したと考えられるので、十分な成果が認められる。						

2. 定量的評価

観点	プロシーディングス 刊行					
判定	A					
判定理由 プロシーディングス刊行：予定通り、国際研究集会の内容をまとめたプロシーディングスを刊行することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	予定通り刊行し、十分な成果が上がった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画していたテーマについて、十分な成果が認められた。文化財の生物被害に特化した国際研究集会は珍しく、充実した内容を英文でまとめて提供することができたことは、国内のみならず国外にとっても貴重な資料となり、今後のこの分野の発展に資するものである。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6216

業務実績書

研No.68

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（(2)－①）		
【事業概要】文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を発行する。			
【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長 松村恵司
【スタッフ】			
【主な成果】 紀要等2点、ニュース2種8点、合計10点を刊行した。			
【年度実績概要】 (紀要等) 『奈良文化財研究所紀要 2013』 2013.6月刊、3,000部 『奈良文化財研究所概要 2013』 2013.7月刊、2,700部 (ニュース) 『奈文研ニュース』 NO.49 2013.6月刊、3,000部 『奈文研ニュース』 NO.50 2013.9月刊、3,000部 『奈文研ニュース』 NO.51 2013.12月刊、3,000部 『奈文研ニュース』 NO.52 2014.3月刊、3,000部 『埋蔵文化財ニュース』 NO.154 (全国木簡出土遺跡・報告総覧)、2014.2月刊、2,500部 『埋蔵文化財ニュース』 NO.155 (現場のための環境考古学)、2014.3月刊、2,500部 『埋蔵文化財ニュース』 NO.156 (奈良文化財研究所が公開しているデータベース)、2014.3月刊、2,500部 『埋蔵文化財ニュース』 NO.157 (2012年度埋蔵文化財関係統計資料)、2014.3月刊、2,200部			
			
『奈良文化財研究所紀要 2013』『奈良文化財研究所概要 2013』			
【実績値】 刊行数：紀要1点、概要1点、奈文研ニュース4点、埋蔵文化財ニュース4点、計4種10点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6216

自己点検評価調査

研No.68

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性				
判定	A	A				
判定理由 適時性：調査研究の成果を適時に刊行できた。 継続性：継続的な定期刊行物として刊行できた。						

2. 定量的評価

観点	刊行数					
判定	A					
判定理由 刊行数：当初の計画どおりに刊行することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定期刊行物は、研究成果を公表するものとして計画的に発行できた。 また、多様な研究成果、特に継続的な調査研究の成果を専門家だけでなく、一般の方にもわかりやすい形での刊行に努めた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	紀要、概要、ニュースの刊行は計画どおり順調に実施できた。

業務実績書

研 No. 69

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	第37回文化財の保存と修復に関する国際研究集会（(2)－②）
【事業概要】 第37回文化財の保存と修復に関する国際研究集会「「かたち」再考―開かれた語りのために―」を開催した。	
【担当部課】	企画情報部
【プロジェクト責任者】	主任研究員 皿井 舞
【スタッフ】 田中淳（部長）、山梨絵美子（副部長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、小林達朗（主任研究員）、小林公治（広領域研究室長）、二神葉子（情報システム研究室長）	
【主な成果】 26年1月10日（金）～12日（日）、東京文化財研究所の地下セミナー室において、第37回文化財の保存と修復に関する国際研究集会を開催した。最初の2日間は基調講演、研究発表（セッション1～3）、3日目は前2日間の研究発表に基づいたラウンドテーブルを行った。	
【年度実績概要】 プログラムは以下の通り。 趣旨説明「今、なぜ「かたち」なのか」皿井舞（東京文化財研究所） 基調対談「生まれてくるくかたち」イケムラレイコ（アーティスト）・田中淳（東京文化財研究所） セッション1：群れとしての「かたち」 セッション趣旨説明 江村知子（東京文化財研究所） サイモン・ケイナ「先史時代からみた「かたち」の概念―土偶や縄文時代の遺物の観察を通して」（セインズベリー日本藝術研究所） 高桑いづみ「くり返す」ということ―音楽の「かたち」と変化する伝承―（東京文化財研究所） ユキオ・リビット「蟠龍図の「かたち」と行為」（ハーバード大学） 小沢朝江「近代日本の行在所にみる様式の創造」（東海大学） セッション討議 司会：江村知子、荒川正明（学習院大学） セッション2：個としての「かたち」 セッション趣旨説明 塩谷純（東京文化財研究所） 小林達朗「美しい術―国宝千手観音像の場合」 内呂博之「「かたち」への挑戦―岡田三郎助と藤田嗣治」（金沢21世紀美術館） 大島徹也「ポロックをポロックとして見る―ジャクソン・ポロックのオールオーバーのボード絵画」（愛知県美術館） 渡部泰明「歌のくかたち―源俊賴の方法」（東京大学） セッション討議 司会：塩谷純、藤川哲（山口大学） セッション3：「かたち」をささえるもの セッション趣旨説明 綿田稔（東京文化財研究所） メラニー・トレーデ「八幡縁起のローカリゼーション」（ハイデルベルグ大学） 崔公鎬「器―社会的形態・文明の記憶」（韓国伝統文化大学校）（通訳：稲葉真以／韓国光云大学） 塚本鷹充「中国絵画史における「人格」と「かたち」―呉彬「山陰道上図巻」と価値評価の構造」（東京国立博物館） 桑木野幸司「記憶のかたち―コスモ・ロッセリ『人工記憶の宝庫』（1579年）における天国と地獄の表象」（大阪大学） セッション討議 司会：綿田稔（東京文化財研究所）、佐藤直樹（東京芸術大学）	
【実績値】 開催回数：1回（平成26年1月10日～12日） 国内外からの招聘者数：14名（海外5名、国内9名） 満足度：「たいへん満足」「おおむね満足」が26年1月10日：100パーセント、1月11日：95.8パーセント	
【備考】 第37回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「「かたち」再考―開かれた語りのために」（予稿集）400部 印刷物数：ポスター200枚、チラシ4000枚、プレプリント300部 参加者数：260名	

自己点検評価調査

研 No. 69

1. 定性的評価

観点	適時性	独自性	発展性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：美術における制度史の研究が蓄積され、造形を再考するのにより機会に開催できた。 独創性：学問諸分野をまたぐ「かたち」という枠組みを設定して議論することができた。 発展性：今後の議論につながる課題が浮き彫りになった。						

2. 定量的評価

観点	開催回数	国内外からの 招聘者数	満足度			
判定	A	A	A			
判定理由 開催回数：規定の回数を実行することができた。 国内外からの招聘者数：計画通りに招聘できた。 満足度：2 日間にわたりアンケートを実施、多くの参加者から「たいへん満足」「おおむね満足」という評価を得ることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当所で主催した「今、日本の美術史学をふりかえる」（1997 年）以後、美術史学の分野で制度史の調査研究成果が蓄積された段階で、再度、造形作品を「かたち」という枠組みで見直すきっかけをつくることができた。定性的、定量的とも A 評価と考え、総合的にも A と判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	定性的にも定量的にも高い水準で実施することができたので、順調と判断した。 次年度には本シンポジウムの報告書を刊行する予定である。また、議論によって浮かび上がってきた課題についてさらに深めるべく、研究会を開催していきたい。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平成 25 年度オープンレクチャー ((2) - ②)		
【事業概要】 企画情報部の美術史研究の成果を一般に公表することを目的とする。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	企画情報部長 田中淳
【スタッフ】 山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、中野照男（客員研究員、大東文化大学非常勤講師）、三上豊（客員研究員、和光大学教授）、近松鴻二（客員研究員、国士舘大学非常勤講師）、吉田千鶴子（客員研究員、東京藝術大学非常勤講師）、			
【主な成果】 第 47 回企画情報部オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」と題して 4 講演を 2 日間にわたり開催した（参加者数：207 人、アンケートによる満足度：85%（回収率：89%））。			
【年度実績概要】 企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年度で 47 回目を迎えた。昨年度同様、本年度も金曜日と土曜日の午後、2 日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。「モノ／イメージとの対話」をテーマに掲げ、個々の講演内容は以下の通りである。 今回は 2 日間でのべ 207 人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、185 人から回答を得た（回収率：89%）。満足度に関する回答結果は、「たいへん満足した」77 人、「おおむね満足した」81 人、「普通だった」12 人、「不満が残った」6 人、無回答 9 人、回答者の 85%が満足感を得たことがわかった。			
第 1 日目 25 年 10 月 4 日（金曜日）午後 1：30～4：30 東京文化財研究所地下セミナー室 「平安仏画の表現—虚空蔵菩薩と千手観音像—」小林達朗（東京文化財研究所） 「高麗仏画の表現—凝縮された美—」鄭于澤（東国大学校大学院教授・同大学校博物館館長）			
第 2 日目 25 年 10 月 5 日（土曜日）午後 1：30～4：30 東京文化財研究所地下セミナー室 「螺鈿を訪ねて西へ東へ—5000 年の世界史を探る—」小林公治（東京文化財研究所） 「世界遺産—現状と問題、将来像—」二神葉子（東京文化財研究所）			
 オープンレクチャー開講（第 1 日目）			
【実績値】 参加者数 207 人 満足度 85%（回収率：89%）			
【備考】			

自己点検評価調査

研No.70

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：企画情報部の美術史研究の現在の最新成果を反映させて、所員によって高精細デジタル画像撮影によって得られた成果を「平安仏画の表現―虚空蔵菩薩と千手観音像―」として公表を行うとともに、その対比として韓国の仏画研究者による自国仏画の微細な研究成果の公表を併せて行うことで、日本の仏画と相違を浮かびあがらせながら、一般への成果公表を行った。併せて、所員それぞれの最新の調査・研究を公表することで、東京文化財研究所企画情報部の研究の「今」を一般に公表し、その適時性において十分に成果が認められた。 独創性・発展性：それぞれの研究成果を単に公表するのではなく、「モノ／イメージとの対話」という独自の統一のテーマで括りつつ、成果公表を行い、それぞれの調査・研究への展望を示し、来聴者の満足度を十分に得られた。 継続性：企画情報部のオープンレクチャーとして、途切れることなく第47回目の開催を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	参加者数	満足度				
判定	A	A				
判定理由 参加者数・満足度：多くの参加者を得、高い評価を得たため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的にも定量的にも高い評価を得たためAと判定した。 次年度も文化財に関する調査・研究に基づく最新の成果・新知見を、時宜に適応しながら公表し、その参加者数、満足度においても高い評価を目指したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度も計画通り実施し、「平成25年度オープンレクチャー」を100%達成したので順調と判定した。 中期計画の趣旨に沿いつつ、次年度も、文化財に関する調査・研究に基づく最新の成果・新知見を「モノ／イメージとの対話」という統一テーマで括りつつ、公開講演という形態をとりつつ成果・知見を、一般に公表・還元していきたい。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	公開講演会、現地説明会等の開催((2)ー②)		
【事業概要】 文化財に関する調査・研究に基づく成果について、公開講演会、現地説明会等の開催により、積極的に公開・提供する。			
【担当部課】	研究支援推進部 連携推進課、研究支援課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成 研究支援課長 今西康益
【スタッフ】松本正典（連携推進課課長補佐）、米野元則（連携推進課専門職員）、江川 正（宮跡等活用支援係長）、三本松俊徳（宮跡等活用支援係係員）			
【主な成果】 （１）公開講演会は、例年実施している定例公開講演会（奈良）を２回、特別講演会（東京）を１回、飛鳥資料館特別展記念講演会を２回開催した。いずれも多く参加者があり、日頃の奈文研研究成果を一般に発信ができた。 （２）発掘調査に伴う現地説明会等を平城地区、飛鳥藤原地区あわせて計５回実施した。 このことにより調査研究成果を適時適切に国民に公開公表することができ、事業としては順調に実施できた。			
【年度実績概要】 （１）公開講演会等 ・第112回公開講演会 25年6月29日（土） 聴講者数250人 場所：平城宮跡資料館講堂 講演者数3名 アンケート結果＝回収数194人 回収率77.6% 満足度A＝170人（87.6%）／B＝23人（11.9%）／C＝1人（0.5%） ・第113回公開講演会 25年10月26日（土） 聴講者数176人 場所：平城宮跡資料館講堂 講演者数3名 アンケート結果＝回収数101人 回収率57.4% 満足度A＝90人（89.1%）／B＝10人（9.9%）／C＝1人（1.0%） ・特別講演会（東京会場）25年9月22日（日） 聴講者数408人 場所：有楽町朝日ホール 講演者数6名 アンケート結果＝回収数189人 回収率77.8% 満足度A＝166人（87.8%）／B＝22人（11.6%）／C＝1人（0.6%） ・飛鳥資料館春期特別展「飛鳥寺2013」記念講演会 25年5月18日（土） 参加者数71人 場所：飛鳥資料館講堂 講演者数1人、アンケート結果＝回収数54人、回収率76.1% 満足度A＝54人（100%）／B＝0人（0%）／C＝0人（0%） ・飛鳥資料館秋期特別展「飛鳥・藤原京への道」記念講演会 25年11月16日（土） 参加者数112人 場所：飛鳥資料館講堂 講演者数1人、アンケート結果＝回収数88人、回収率78.6% 満足度A＝85人（96.6%）／B＝2人（2.3%）／C＝1人（1.1%） （２）発掘調査現地説明会等 ・飛鳥藤原第177次（甘樫丘東麓遺跡）1,038㎡、発掘調査現地説明会 25年9月7日（土）、参加者1,122人、報告者1人 アンケート結果＝回収数378人、回収率33.7% 満足度A＝208人（55.0%）／B＝164人（43.4%）／C＝6人（1.6%） ・平城第516次（興福寺西室）985㎡、発掘調査現地見学会 25年9月28日（土）、参加者885人、報告者1人 アンケート結果＝回収数194人、回収率21.9% 満足度A＝78人（40.2%）／B＝113人（58.2%）／C＝3人（1.6%） ・飛鳥藤原第179次（藤原宮朝堂院朝庭）1,430㎡、発掘調査現地説明会 25年12月21日（土）、参加者337人、報告者1人 アンケート結果＝回収数80人、回収率23.7% 満足度A＝47人（58.7%）／B＝31人（38.8%）／C＝2人（2.5%） ・平城第519次（薬師寺十字廊）872㎡、発掘調査現地見学会 26年2月15日（土）、参加者350人、報告者1人 アンケート結果＝回収数65人、回収率18.5% 満足度A＝43人（66.2%）／B＝22人（33.8%）／C＝0人（0%） ・平城第520次（平城宮第一次大極殿院）476㎡、発掘調査現地見学会 26年3月8日（土）、参加者715人、報告者1人 アンケート結果＝回収数163人、回収率22.7% 満足度A＝102人（62.6%）／B＝61（37.4%）／C＝0人（0%）			
			第112回公開講演会風景
【実績値】 開催回数10回 （１）公開講演会等開催回数 5回 （２）発掘調査現地説明会等開催回数 5回 （参考値） （１）公開講演会等 聴講者延人数1,017人、アンケート回収数626人、回収率61.6% 満足度A＝565人（90.3%）、B＝57人（9.1%）、C＝4人（0.6%） （２）発掘調査現地説明会等 参加者延人数3,409人 内アンケート実施回数5回 回収数880人 回収率25.8% 満足度A＝478人（54.3%）、B＝391人（44.4%）、C＝11人（1.3%）			
【備考】			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：広く一般に公開し、その必要性に答えることができた。 独創性：公開は、内容の新規性及び卓越性を持たせ実施することができた。 発展性：聴講者は多数かつ多種にわたり、様々な分野への影響が期待される。 継続性：様々な媒体を活用して、研究成果の継続的な公表を行った。 正確性：多数が満足する正確性を持った内容であった。						

2. 定量的評価

観点	開催回数					
判定	A					
判定理由 開催回数：公開講演会、現地説明会ともに予定どおり実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	公開講演会については年5回実施し、発掘調査現地説明会等については、5回実施し、いずれも多数の参加者があった。これらの参加者に対して行ったアンケートでは、公開講演会では99.4%、発掘調査現地説明会では98.8%の方から「大変満足である」または「おおむね満足である」という結果を得ている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	公開講演会、現地説明会の開催は計画のとおり順調に実施できた。 今後も、調査研究の成果に基づく講演、現地説明会等の内容及び配付資料の充実、アンケート調査による参加者ニーズの把握を図る。さらに事業広報を充実させることにより参加者数の増加と満足度の向上に努める。

中期計画の項目		6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信	
プロジェクト名称		ウェブサイトの運用((2)ー③)	
【事業概要】 研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトの充実を図る。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】 田中淳(部長)、山梨絵美子(副部長)、津田徹英(文化形成研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、綿田稔(文化財アーカイブズ研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、小林達朗(主任研究員)、皿井舞(主任研究員)、城野誠治(専門職員)、中村明子(アソシエイトフェロー)、井上さやか(アソシエイトフェロー)、橋川英規(アソシエイトフェロー)、福永八朗(アソシエイトフェロー)、小山田智寛(研究補佐員)、高橋佑太(研究補佐員) 広報委員(LAN): 川野邊渉(文化遺産国際協力センター長) 各部門 LAN 担当: 高砂健介(研究支援推進部管理室長)、綿田稔(企画情報部文化財アーカイブズ研究室長)、飯島満(無形文化遺産部音声・映像記録研究室長)、吉田直人(保存修復科学センター主任研究員)、加藤雅人(文化遺産国際協力センター主任研究員)			
【主な成果】 ウェブサイトのレイアウトを更新し、毎月の活動報告(和英)の掲載、また適宜イベント情報の公開を行うとともに、それら更新情報についてメールマガジンによる情報発信を行った。			
【年度実績概要】 ・ウェブサイトのリニューアルの継続 昨年度に引き続きウェブサイトのトップページ及び案内、活動報告等全所的な情報に関するページのレイアウトを変更し、各種の情報へのアクセスの利便性を向上させた。研究所の業務紹介としては、東京文化財研究所の刊行物(図書)について25年度までのデータを追加掲載した。 ・ウェブサイトの適宜更新 各部・センターの調査研究、会議や研究会の開催等の活動について、日本語及び英語による「活動報告」として毎月掲載した。研究会開催や職員募集、入札公告などの情報については、依頼があり次第ただちに掲載した。 また、ウェブサイトの内容の充実を図り、開所記念展覧会目録など、当研究所で蓄積しているデータの公開を実施した。さらに、東日本大震災後の対応として、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業に関連する活動や被災した文化財などへの対応について、昨年度に引き続きウェブサイトによる情報発信を行った。 ・テキストデータ、画像データ公開のためのシステムの検討 テキストデータや、メタデータを含む画像データのデータベース化・検索可能な形で公開を容易にする Wordpress を用いた情報公開について公開の方法について検討を行い、所内で公開した。テキストデータは「日本美術年鑑」所載物語記事、画像データは和田新撮影による西アジア地域を中心とした画像、および当研究所所蔵ガラス乾板の画像である。 ・メールマガジンの発信 活動報告を含むウェブサイトの更新情報や、研究会開催、職員募集や入札公告などの情報を登録者に対して直接発信する手段としてメールマガジンの送信を随時行い、平成25年度は11件を送信した。 ・アクセス数 本年度のウェブサイトへのアクセス数は1,410,075件(セッション数)で、うち上半期は741,419件であり、前年度の同時期に比べ117,588件増加した			
【実績値】 Wordpressによるデータベース公開数 1件 メールマガジン送信数 11件 (参考値) ウェブサイトアクセス件数 1,410,075件		テキストデータ事例(和田新調査撮影記録)	
【備考】			

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	独創性	発展性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：速やかに情報の更新を行うことができた。 効率性：ウェブサイトのデザインの大きな変更は外部委託、日々の更新作業はアシスタントが担当するなど分担して効率的に更新を行うことができた。 継続性：活動報告の更新を毎月実施するなど、継続的に情報公開を行うことができた。 独創性：活動報告や美術界年史（彙報）など独自の情報を掲載することができた。 発展性：東京文化財研究所所蔵ガラス乾板や和田新撮影画像、物故記事の所内ウェブサイトでの公開のシステムを構築したことで、今後、その他の画像も含めた一般公開・活用のシステムを検討する上での基礎とすることができた。 正確性：ウェブサイトへの掲載の際は複数の担当者が記事の内容を確認することで、正確性を保つことができた。						

2. 定量的評価

観点	Wordpressによるデータベース公開数	メールマガジン送信数				
判定	A	A				
判定理由 Wordpressによるデータベース公開数： 今年度はこれまでになかった試みとして、Wordpressによる横断検索も可能なデータベースを1件公開することができた。 メールマガジン送信数： また、メールマガジンについても、ほぼ月に1回の発行ペースを維持することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ウェブサイトの運用については、適時性、効率性、継続性、独創性、発展性、正確性が認められた。 また、試験公開版のデータベースを構築し、来年度早々の公開に向けての準備ができた。したがって実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ウェブサイトの情報へのアクセスの利便性向上、データの充実、速やかな更新を実施することができた。ウェブサイトのアクセス件数も増加している。このような実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると考えた。次年度以降も、現在それぞれの部門で独自に作成しているウェブサイトのデザインの統一や、より多くのデータベースの公開など、当研究所の広報・研究成果の公開をより効果的に実施するための業務を実施していく。

業務実績書

研No.73

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	ウェブサイトの充実((2)ー③)
【事業概要】 研究所の事業・研究成果をはじめ、催し物案内など様々な広報を実施する。新たな情報発信をすべく更なる内容の検討を行う。	
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課
【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中 康成
【スタッフ】 渡 勝弥(文化財情報係長)、高田祐一(連携推進課アソシエイトフェロー)	
【主な成果】 (1) ウェブサイトを多言語化対応した。 (2) リポジトリをリニューアルし、利便性が向上した。 (3) コラムを継続発信し、企画展ブログを試行した。 (4) アクセス解析を開始した。	
【年度実績概要】 (1) ウェブサイトを多言語化対応した。英語、中国語、韓国語に対応することにより、国際的な情報発信が可能となった。研究成果の一部は英訳し公開している。 (2) 学術情報リポジトリを再構築した。リポジトリの画面構成など見直すことにより、利便性が向上した。また内容がウェブサイトと重複があったが、統合することにより、整合性を確保した。 (3) コラムを継続発信し、企画展ブログを試行した。研究員によるコラム「作寶樓」を定期的にリリースした。定期的なリリースによりコンテンツとして定着しつつある。また展示企画室による特設ブログ「平城京どうぶつえん」の基盤構築とアクセス解析を実施した。このブログは奈文研ウェブサイト本体のアクセス件数の15%に相当し、各種の効果が大きかった。 (4) ウェブサイトのページ毎にアクセス解析システムを設定した。ページ単位でアクセスを解析できるようになり、今後の施策立案に活用できるようになった。	
	
韓国語対応のウェブサイト	
【実績値】 (参考値) ウェブサイトアクセス件数：447,563 件	
【備考】	

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：学術情報リポジトリを再構築することにより適時な成果発信を可能とした。 発展性：多言語化対応によりグローバルな情報発信が可能となった。 効率性：新たにアクセス解析システムを導入したことにより、効率よく各種施策の立案・事後評価が可能となった。 継続性：コンテンツの継続的な配信により閲覧者の定着を確認できた。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
判定理由						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	情報発信の国際化、学術情報の成果発信、最新情報の発信、アクセス解析システムの確立を適切に推進した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ウェブサイトの維持更新、情報の発信を滞りなく実施した。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	平城宮跡資料館における展示公開((3)－①)
【事業概要】 平城宮跡に関する理解促進、ならびに当研究所が行う平城宮・京の発掘調査及び研究の成果公開や情報発信のため、平城宮跡資料館において常設展・企画展を実施する。	
【担当部課】	企画調整部 展示企画室
【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山 洋
【スタッフ】 加藤真二(展示企画室長)、中川あや(展示企画室研究員)、渡邊淳子(展示企画室アソシエイトフェロー)、松本正典(連携推進課課長補佐)	
【主な成果】 (1) 常設展の円滑な実施のため、その維持・管理に努めた。 (2) 春期企画展「発掘速報展平城 2012」を 25 年 3 月 16 日～6 月 2 日に開催した。 (3) 夏期企画展「平城京どうぶつえん」を 25 年 7 月 13 日～9 月 23 日に開催した。 (4) 秋期特別展「地下の正倉院展－木簡学ことはじめ/平城宮・京の発掘調査の 50 年」を 25 年 10 月 19 日～12 月 1 日に開催した。	
【年度実績概要】 (1) 常設展のみの開館日：172 日、入館者数：39,502 名。 (2) 開催期間：25 年 3 月 16 日～6 月 2 日 (25 年度は 54 日間)。 内容：奈良文化財研究所が 2011 年度に平城宮・京で実施した発掘調査の速報展を行った。主要 3 地点の調査成果について、出土品や調査写真をもとに紹介。 来館者：39,179 名(うち 25 年度 34,025 名)。 (3) 開催期間：25 年 7 月 13 日～9 月 23 日 (43 日間)。 内容：平城宮・京から出土した様々な動物の出土品を集めて展示した。夏休みの子ども向け企画として開催し、ワークショップなど親子で楽しめるイベントも実施した。 会場リーフレット『平城京どうぶつえん』、図録『平城京動物園』25 年 7 月 13 日刊行。 来館者数：18,616 名 (4) 開催期間：25 年 10 月 19 日～12 月 1 日 (39 日間)。 内容：毎年恒例の木簡の実物公開を行った。本年度は、木簡研究確立のきっかけとなった、平城宮内裏北外郭官衙 SK820 の出土木簡を展示し、黎明期の木簡研究が確立していく様子を紹介した。同時開催として、都城発掘調査部平城地区(元平城宮跡発掘調査部)設立 50 周年を記念して、「平城宮・京発掘調査の 50 年」と題し、写真パネル・動画展示を行った。会場リーフレット『地下の正倉院展－木簡学ことはじめ』25 年 10 月 19 日刊行。 来館者：16,753 名。	
	
平城京どうぶつえん おやこワークショップ	
【実績値】 平城宮跡資料館 来館者数 108,896 名(目標値：85,300 名)、開館日数 328 日。特別展開催 1 回、企画展開催 2 回。 (参考値) (1) 常設展のみ 172 日、来館者 39,502 名 (2) 25 年 4 月 1 日～6 月 2 日 (54 日)、来館者 34,025 名、 ギャラリートーク 6 回 (25 年 4 月 12 日、4 月 19 日、4 月 26 日、5 月 17 日、5 月 24 日、5 月 31 日、参加者 93 名) クイズ大会 2 回 (25 年 4 月 5 日、5 月 10 日、参加者 36 名) (3) 25 年 7 月 13 日～9 月 23 日 (63 日)、来館者数 18,616 名 博士のおもしろどうぶつ講座 4 回 (25 年 7 月 26 日、8 月 9 日、8 月 23 日、8 月 30 日、参加者 110 名) おやこワークショップ 2 回 (25 年 8 月 2 日、8 月 16 日、参加者 81 名) リーフレット 1 部 (①)、図録 1 部 (②) (4) 25 年 10 月 19 日～12 月 1 日 (39 日)、来館者 16,753 名 ギャラリートーク 3 回 (25 年 10 月 25 日、11 月 8 日、11 月 22 日、参加者 121 名) リーフレット 1 部 (③)	
【備考】 ①『平城京どうぶつえん』会場リーフレット 2013.7 5,000 部刊行 ②『平城京どうぶつえん』図録 2013.7 2,500 部刊行 ③『地下の正倉院展－木簡学ことはじめ』会場リーフレット 2013.10 8,500 部刊行 (3) 展示企画の公表「平城宮跡資料館夏期企画展における新たな試み」『奈良文化財研究所紀要 2014』2014.6(予定)	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6311

自己点検評価調査

研No.74

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：都城発掘調査部平城地区（元平城宮跡発掘調査部）設立 50 周年に合わせた展示を開催することができた。 独創性：子ども向けの企画展やワークショップを開催し、出土遺物展示の新たな切り口、表現方法を試みた。 継続性：毎年開催している木簡の実物展示を実施し、貴重な文化財を公開する機会を設けた。						

2. 定量的評価

観点	来館者数	開館日数	特別展開催数	企画展開催数		
判定	A	A	A	S		
判定理由 来館者数：年間入館者数 108,896 名で目標値（85,300 名）を達成した。 開館日数：定期休館日を除けば、毎日開館した。 特別展開催数：目標値（年 1 回）を達成した。 企画展開催数：目標値（年 1 回）に対し年 2 回開催した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	いずれの観点からも十分な成果をあげ、時宜を得たテーマ設定、展示手法の工夫等により、来館者から高い満足度が得られた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	前年度同様、定期的に企画展・特別展を実施することができ、展示内容、展示構成、展示手法ともに向上発展を遂げていることから「順調」と判定した。

業務実績書

研No.75

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	飛鳥資料館における展示公開((3)ー②)		
【事業概要】 飛鳥資料館第1、第2展示室の常設展示の維持管理を行うとともに、展示の手直しを適宜行う。特別展を春秋の2回開催するとともに企画展、講演会を開催する。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 石橋茂登
【スタッフ】	丹羽崇史（学芸室研究員）、成田 聖（前学芸室任期付研究員）		
【主な成果】 (1) 第1展示室の展示内容を部分的に改装し、特別陳列室の内装を全面的に改装。重量石像物の床補強を実施した。 (2) 第3回写真コンテスト「神々の山—大和三山のある風景—」（作品展示25年3月9日～4月14日）を開催した。 (3) 春期特別展「飛鳥寺2013」を25年4月26日～6月2日に開催し、記念講演会を25年5月18日に開催した。 (4) 春のミニ展示「坂田武嗣「風景の記憶」」を25年5月1日～6月30日に開催した。 (5) 夏期企画展「飛鳥・藤原を考古科学する」を25年8月1日～9月1日に開催し、ギャラリートークを25年8月4日、8月18日に実施した。 (6) 第4回写真コンテスト「飛鳥川の導」（作品展示25年9月7日～10月6日）を開催した。 (7) 明日香村活性化事業「飛鳥光の回廊」に参加した。（25年9月14日開催、15日は台風のため中止） (8) ミニ企画展「日光男体山のかがやき—山岳信仰奉養鏡の世界—」を25年9月10日～9月16日に開催した。 (9) 秋期特別展「飛鳥・藤原京への道」を25年10月18日～12月1日に開催し、記念講演会を25年11月16日に開催した。 (10) 「発見30周年記念 キトラ古墳壁画特別公開」を26年1月17日～1月26日に開催した。 (11) 冬期企画展「飛鳥の考古学2013」を26年2月14日～3月16日に開催した。			
【年度実績概要】 (1) 第1展示室の展示内容を部分的に改装し、特別陳列室の内装を全面的に改装。重量石像物の床補強を実施。 (2) 「神々の山—大和三山のある風景—」をテーマに募集した作品を展示し優秀作品を選出した。 (3) 飛鳥寺関係の研究を展示した。佐川正敏氏（東北学院大学）を講師に記念講演会を開催した。 (4) 奈良・飛鳥を題材とする坂田武嗣氏のイラストをロビーにて展示した。 (5) 奈文研埋蔵文化財センターの研究成果を展示した。ギャラリートークを2回実施した。 (6) 「飛鳥川の導」をテーマに募集した作品を展示し優秀作品を選出した。第1回～第4回の優秀作を収録した写真集を刊行した。 (7) 明日香村活性化事業の夜間照明イベントに参加し、前庭にろうそくを並べ夜間開館した。 (8) 日光男体山出土の青銅鏡154面を展示した。 (9) 竹内街道1400年と飛鳥藤原宮跡発掘調査部40周年を記念して同調査部の成果を主に道に関する調査研究成果を展示した。近江俊秀氏（文化庁）を講師に記念講演会を開催した。 (10) キトラ古墳壁画発見30周年を記念して文化庁と共催で壁画特別公開を開催した。 (11) 昨年度の飛鳥地域の発掘成果を中心に展示した。奈良県立橿原考古学研究所、明日香村と共催した。			
【実績値】 飛鳥資料館 平成25年度来館者数41,736名（目標値：48,800名） 特別展開催数2回、企画展等開催数7回（企画展2回、その他5回）、講演会等開催4回（講演会2回、ギャラリートーク2回）、図録類刊行数7冊(①～⑦) （参考値） (2) 応募作品210点。作品展示期間25年3月9日～4月14日（32日間）。入館者3,059名。 (3) 25年4月26日～6月2日（38日間）。入館者9,406名。講演会1回（25年5月18日、参加71名）。図録1冊（①）。 (4) 25年5月1日～6月30日（57日間）。入館者2,648名。 (5) 25年8月1日～9月1日（28日間）。入館者2,633名。ギャラリートーク2回（25年8月4日、8月18日）。カタログ1冊（②）。 (6) 応募作品162点。作品展示期間25年9月7日～10月6日（26日間）。入館者3,359名。写真集1冊（③）。 (7) 25年9月14日開催（1日）。入館者399名。 (8) 25年9月10日～9月16日（7日間）。入館者1,046名。研究図録1冊（④）。 (9) 25年10月18日～12月1日（45日間）。入館者9,132名。記念講演会1回（25年11月16日、参加112名）。図録1冊（⑤）。 (10) 26年1月17日～1月26日（10日間）。入館者4,008名。カタログ1冊（⑥）。 (11) 26年2月14日～3月16日（27日間）。入館者1,851名。カタログ1冊（⑦）。			
【備考】 ①飛鳥資料館図録第58冊『飛鳥寺2013』2013.4。 ②飛鳥資料館研究図録第17冊『日光二荒山神社中宮祠宝物館蔵鏡図録』2014.3。 ③飛鳥資料館写真コンテスト入賞者作品集(第1回～第4回)『飛鳥—知られざる情景—』2014.3。 ④飛鳥資料館カタログ第28冊『飛鳥・藤原を考古科学する』2013.8。 ⑤飛鳥資料館図録第59冊『飛鳥・藤原京への道』2013.10。 ⑥飛鳥資料館カタログ第29冊『キトラ古墳壁画発見30周年記念 白虎 玄武 朱雀 青龍』2014.1。 ⑦飛鳥資料館カタログ第30冊『飛鳥の考古学2013』2014.2。			

自己点検評価調査

研No.75

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	正確性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：考古学、保存科学など諸分野の最新の調査、研究の成果を迅速に展示に生かした。 独創性：キトラ古墳壁画、飛鳥藤原地区に関する発掘成果といった奈文研の調査研究の蓄積を生かした、他ではできない展示を実施した。 発展性：特別展、企画展以外の展示やイベントも積極的に実施し、多彩な事業への可能性を示した。 正確性：奈文研の調査研究活動成果をベースとして展示を構築することで正確かつ精緻な内容となった。 継続性：第1展示室を中心とした改装を継続し改善を続けている。キトラ古墳壁画の公開を継続している。						

2. 定量的評価

観点	来館者数	特別展開催数	企画展等 開催数	講演会等 開催数	図録類刊行数	
判定	B	A	S	A	S	
判定理由 来館者数：来館者数は目標値の85.5%となった。 特別展開催数：目標値（年2回）を達成した。 企画展等開催数：企画展等開催目標値（年1回以上）に対し7回開催した。 講演会等開催数：目標（年2回）を達成した。 図録類刊行数：目標（年2冊以上）に対し7冊刊行した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	いずれの観点からも十分な成果をあげることができた。次年度は第1展示室の改装を継続し、各種展示と出版物に関しても精選して充実したわかりやすい内容を実現するよう取り組む。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	来館者数以外はA以上の評価であり、順調に推移していると判断した。キトラ古墳壁画の特別公開に頼らず入館者を呼べる展示、企画を検討していきたい。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	藤原宮跡資料室における展示公開((3)ー③)
【事業概要】 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）庁舎に併設された藤原宮跡資料室及びエントランスにおいて、常設展示、発掘調査成果の速報展示などを実施し、展示公開の充実を図る。	
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）
【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、今井晃樹・降幡順子・山本崇・黒坂貴裕・森川実(以上、都城発掘調査部主任研究員)、廣瀬寛・和田一之輔・諫早直人(以上、考古第一研究室研究員)、若杉智宏・大澤正吾(以上、考古第二研究室研究員)、森先一貴(考古第三研究室研究員)、大林潤(遺構研究室研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、荒田敬介(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)	
【主な成果】 常設展示及び発掘調査成果の速報展示などを通年で実施し、展示公開の充実を図った。庁舎エントランスの速報展示コーナーでは、最新の調査研究成果の公開を実施した。その他、適宜展示解説や各地の博物館への文化財貸与を行った。	
【年度実績概要】 ・都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）庁舎に併設された藤原宮跡資料室において、通年にわたり常設展示を実施した。 ・申請のあった団体などへは展示説明、藤原宮跡及び発掘調査現場の案内などの応対を行った。 ・庁舎エントランスに設置した発掘調査成果の速報展示コーナーにおいては、夏季速報展として「東方官衙北地区の調査」及び整理分析が進んだ「藤原宮朝堂院東第6堂の瓦」と「石神遺跡の銅製人形」の各展示を行った。その後、25年10月15日～12月27日にかけて、飛鳥藤原宮跡発掘調査部設立40周年を記念する「写真でふりかえる発掘調査40年」の展示を実施し、解説パンフレットを発行した。また、「東日本大震災復興調査における奈文研の取り組み」のパネル展示を行った。 ・橿原市の解説ボランティアによる土日開館を行った。 ・各地の博物館等の要請に応じ、当調査部保管遺物ならびに模型・模造品などの貸与を行った。	
	
「写真でふりかえる発掘調査40年」の展示風景	
【実績値】 入室者数：7,869名（目標値4,509名）、開室日数：356日 刊行物数：1件① 報道等数：3件② （参考値） 各種団体などへの展示説明：10件 他機関への所蔵品貸出：192件	
【備考】 ①奈良文化財研究所「写真でふりかえる発掘調査40年」2013.10 ②玉田芳英「飛鳥・藤原40年の春秋」『奈文研ニュース』No.50、2013.9	

自己点検評価調査

研No.76

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：調査研究成果を常設展示と速報展示などにより公開し、社会からの多様な要望に対応した。 独創性：調査機関ならではの豊富な実物展示、発掘調査に関連した展示に独創性がある。 発展性：従来の常設展、速報展示に加えて、創設40周年にあわせてこれまでの遺跡写真をパネルにして公開した。 継続性：常設展示及び速報展示を通年で公開し、研究の進展にあわせて内容を更新している。						

2. 定量的評価

観点	入室者数	開室日数	刊行物数	報道等数		
判定	S	A	A	A		
判定理由 入室者数：展示の更新や工夫を行い、目標値4,509人を上回った。 開室日数：土日開室を継続し、昨年度と同様の開室日数を維持した。 刊行物数：予定通りの刊行ができた。 報道等数：展示の広報を3件実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	昨年度に引き続き速報展示を随時変更するなどし、調査成果の速報性を維持している。一部、展示内容を更新し、発展性を示した。また、昨年度に引き続き土日開館の実施により、入室者数及び開館日数を維持し、調査研究成果に公表に大いに貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	土日開館を継続し、常設展示及び速報展示なども充実した内容で継続的に実施しているので、順調と判断した。

業務実績書

研No.77

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	文化庁平城宮跡管理事務所の運営への協力 (4)－①		
【事業概要】 文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等における連携協力、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整及び文化庁施設の維持管理及び修繕等に対して提案、助言、連絡調整等協力する。			
【担当部課】	研究支援推進部研究支援課	【プロジェクト責任者】	研究支援課長 今西 康益
【スタッフ】 江川 正 (宮跡等活用支援係長)、三本松 俊徳 (宮跡等活用支援係係員)			
【主な成果】 (1) 文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等における連携協力、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整及び文化庁施設の維持管理及び修繕等に対して提案、助言、連絡調整等協力し、文化庁の平城宮跡等整備事業に協力した。			
【年度実績概要】 (1) 文化庁平城宮跡等管理事務所の文化庁施設の公開・活用等に対し、以下のとおり積極的に協力した。 ○文化庁施設の公開・活用に対して利用申込者との連絡調整 ○文化庁が実施する各種行事及び宮跡利用者による各種行事、発掘調査等に係る連絡調整 ・関係機関等視察対応 (文部科学省・文化庁等) ○宮跡内施設 (建物、諸設備、工作物等) の整備、維持管理及び修繕等に係る文化庁への助言 ・朱雀門消火設備工事 ・既設水路等清掃 ・東院庭園池清掃 ・第一次大極殿免震装置点検 ・壬生門汚損清掃 ・既設水路補修 ○住民等からの要望や意見の文化庁への取次ぎ ・平城宮跡への来訪者、利用者、近隣住民等からの防火、防犯、植生及び運営等の意見			
			
朱雀門消火設備工事完了検査			
【実績値】			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6411

自己点検評価調査

研No.77

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：緊急性の高い連絡・修繕相談等へ適時に対応したため。 独創性：宮跡内建物、工作物等の整備、維持管理に寄与したため。 発展性：専門知識を生かした協力による人的投資の効率性は十分に成果が認められた。 継続性：需要に応じた継続的な連携協力体制を行えたため。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等に積極的に協力し、文化庁の要請に応じ、文化庁施設の整備、維持管理及び修繕等に対して適時、的確に対応している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・利用等の連絡、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整、文化庁施設の整備、維持管理及び修繕等の相談に対して適切に対応できている。文化庁施設（復原施設・便益施設等）の計画的整備に対して現況に基づいた維持管理の提案、助言協力等が適切に行われている。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	文化庁・国土交通省が行う平城宮跡の復原・整備への協力（(4)－①）
【事業概要】 文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力、及び国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院復原への協力を行う。	
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）
【プロジェクト責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 小池伸彦・芝 康次郎・庄田慎矢・神野 恵・青木 敬・小田裕樹・渡辺丈彦・石田由紀子・川畑 純・中川二美・渡邊晃宏・馬場 基・山本祥隆・箱崎和久・番 光・海野 聡・松下迪生・井上麻香・中島咲紀・村山聡子・山本 崇・黒坂貴裕・大林 潤・前川 歩（以上、都城発掘調査部）、林 良彦・鈴木智大・平澤 毅・中島義晴（以上、文化遺産部）、小澤 毅・高妻洋成・脇谷草一郎・児島大輔（以上、埋蔵文化財センター）、上田浩司・田中康成・今西康益・江川 正・三本松俊徳（以上、研究支援推進部）	
【主な成果】 (1) 第一次大極殿院の建物復原にあたり、所内検討会及び有識者を招聘した検討会を開催し、記録集を作成した。 (2) 平城宮跡の整備設計・工事等に対して、設計条件の整理、提出資料に対する助言、立会調査等を実施した。 (3) 文化庁や国土交通省が開催する会議等に対して、専門的・技術的な援助・助言を行った。	
【年度実績概要】 (1) 第一次大極殿院の建物復原 ・ 所内検討会を11回開催し、発掘遺構や現存建築などの資料収集と整理を行った。 ・ 有識者を招聘した検討会を2回開催し、助言を得て復原設計に反映させた。 ・ 上記の検討会の記録作成に向けて、活字化した発表録音の校正を行うとともに、印刷原稿の作成などを行った。 (2) 平城宮跡の整備設計・工事等に対する設計条件の整理、助言・調査等 ・ 過去の整備の設計図書の他、発掘遺構の標高など、設計条件の整理を行って適宜情報を提供した。 ・ 文化庁記念物課が行う史跡等における歴史的建造物等の復元の取り扱いに関する専門委員会（「復元検討委員会」）に国土交通省が提出する資料作成について助言等を行った。 ・ 平城宮跡内の整備工事にあたり、発掘調査や立会調査を行って記録を作成した。 (3) 国土交通省や文化庁が開催する以下の会議等に参加し、専門的・技術的な援助・助言を行った。 ・ 国土交通省が開催する「平城宮跡第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会」 第一次大極殿院の建物復原検討成果を発表した。 ・ 文化庁が開催する「平城宮跡保存・活用連絡協議会」 奈良県・奈良市・国土交通省・文化庁の担当職員等と平城宮跡の保存と活用について協議した。 ・ 文化庁が開催する「平城宮跡遺構展示館の露出展示改善に関する検討委員会」 有識者を招聘して行う上記会議に参加し、それに関する情報収集や専門的見地からの助言を行った。	
【実績値】 (1) 検討会開催数 13回（第一次大極殿院建物復原に関する所内検討会開催数11回、有識者招聘検討会開催数2回） 記録集刊行 2冊(①、②) （参考値） (2) 平城宮跡内の整備工事にともなう立会調査出動件数；15件63日以上。 (3) 文化庁や国土交通省が開催する会議等への出席；4回	
【備考】 ①・②『第一次大極殿院復原検討会記録7』・『同8』（内部資料）2014.3	

自己点検評価調査

研No.78

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性	独創性	発展性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：第一次大極殿院の建物復原設計では必要な検討を適時に行い、年度内の検討成果を記録集としてまとめることができた。文化庁や国土交通省の各種要請に対し、的確に対応することができた。 継続性：第一次大極殿院の建物復原に関する所内検討会を継続的に開催することができた。 正確性：第一次大極殿院の建物復原に関する検討会の内容は、精緻な分析に基づいて行うことができた。文化庁や国土交通省の各種要請に対しても、的確に対応することができた。 独創性：第一次大極殿院の建物復原検討会では精緻な分析に基づきつつ、他例のない遺構に対して新たな案を一定の根拠にもとづいて検討することができた。 発展性：復原建物の検討会で行った検討手法は、全国の遺跡整備における建物復元も応用できる。今後の平城宮跡の整備・活用に向けて、次のステップに進むための着実な成果をあげることができた。						

2. 定量的評価

観点	検討会開催数	記録集刊行				
判定	A	A				
判定理由 検討会開催数：研究の進捗にもとづいて適切に検討会を開催することができた。 記録数：当初計画した検討会記録集2冊を刊行することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	復原検討会については、短期間に多視点からの濃密な研究・検討を重ね、概ね復原原案（奈良時代の建物形態がどうであったかの復原案）の概要を示すことができた。今後の実施設計に向けてさらなる細部の設計や検討を進めていきたい。 平城宮跡の整備工事に対する対応も的確に行い、遺跡の保護も十分に行うことができた。次年度も、今年度同様に細心の注意を払いながらおこなってゆきたい。 文化庁や国土交通省からの各種要請すべてに対応することができた。次年度もさらに連携を深めながら、平城宮跡の保護と整備・活用に向けて取り組んでいきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第一次大極殿院の建物復原研究は、これまでの朱雀門や第一次大極殿、東院庭園などの復原検討と比較しても、すでにそれらをのしぐ調査研究を重ねており、順調に検討が行われている。次年度は一般的な設計図には現れない細部、あるいは彩色・金具といった装飾についても具体的な復原検討を行っていききたい。 文化庁や国土交通省からの各種の要請や会議、平城宮跡の整備工事に伴う立会調査に対しても、これまで同様、的確に対応し、平城宮跡の保存・整備・活用に尽力していききたい。

業務実績書

研No.79

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設への協力((4)-①)		
【事業概要】 国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設とその展示に対して、助言・協力をを行う。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 石橋茂登
【スタッフ】 丹羽崇史(学芸室研究員)、成田 聖(前学芸室任期付研究員)			
【主な成果】 (1) 国営飛鳥歴史公園事務所の依頼に基づき、キトラ古墳体験学習館の展示に資する奈文研所蔵資料一覧を作成、提示した。 (2) 断続的に担当者間で調整・協議を行った。			
【年度実績概要】 (1) 国営飛鳥歴史公園事務所の依頼に基づき、キトラ古墳体験学習館の展示に資する、当研究所が所蔵する図書、出土品、映像等の資料の状況を確認した。公園事務所側からはそちらの展示に関する会議や具体的な内容の検討依頼等はなかったため、展示内容についての検討は次年度以降の課題である。 (2) 調整会議、資料一覧に基づき、展示に関して、断続的に担当者間で調整・協議を行い、当研究所が所蔵する出土品、レプリカ、模型等の状況確認と情報共有を行い、今後の協力を備えた。			
			
キトラ古墳出土品レプリカの一部			
【実績値】 資料数 1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6413

自己点検評価調書

研No.79

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：体験学習館展示の実施設計に必須な作業であり、当研究所による発掘調査、展示公開を公園事務所と協力して社会に還元できた。 効率性：部局間で情報を共有し、円滑に状況確認を行い、必要な資料の提供を行うことができた。 継続性：今後の体験学習館展示の計画にあたり、その基礎固めをすることができた。 正確性：調査研究の成果を反映させることができた。						

2. 定量的評価

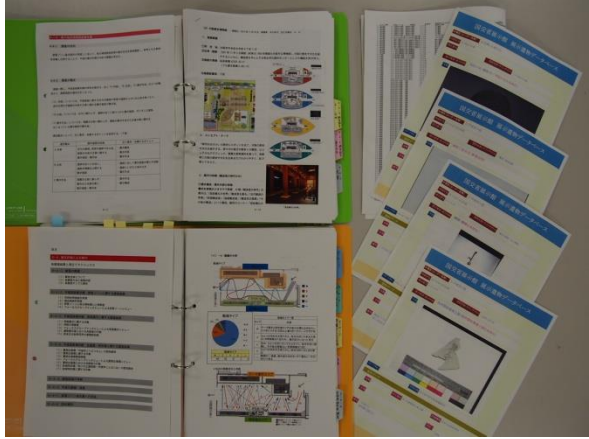
観点	資料数					
判定	A					
判定理由 資料数：国営飛鳥歴史公園事務所の要求に応える詳細な資料を作成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所との調整会議は開催されなかったが、国営飛鳥歴史公園事務所の要請に対応するとともに、当研究所の調査研究、展示の成果を余すことなく、正確に提供し、それらの社会的還元を果たすことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画どおり達成している。次年度以降も積極的に協力していきたい。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	国土交通省が行う平城宮跡展示館（仮称）の建設への協力（(4)－①）
【事業概要】 国土交通省が行う平城宮跡展示館（仮称）の建設にあたり、主に学芸に関わる部分において、専門的な見地から協力をを行う。	
【担当部課】	企画調整部 展示企画室
【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山 洋
【スタッフ】 加藤真二（展示企画室長）、中川あや（展示企画室研究員）、渡邊淳子（展示企画室アソシエイトフェロー）	
【主な成果】 (1) 平城宮跡展示館における公園案内ゾーン、ガイダンスゾーンの展示内容に関する指導ならびに必要な情報提供を行った。 (2) 平城宮跡展示館における詳覧ゾーンの基本設計の見直しを、設計業者の委託を受け、行った。 (3) 平城宮跡展示館と平城宮跡内の他施設との役割分担を検討した。	
【年度実績概要】 (1) 公園案内ゾーン、ガイダンスゾーンの展示計画案の内容について専門的な見地から指導を行い、展示構成について詳覧ゾーンとのバランスや関連性について検証した。展示の設計・実施に資するため、国交省から委託された設計業者から要望のあった、映像、画像などの素材データの所在と内容を確認し、情報を提供した。 (2) 詳覧ゾーンの基本計画の見直しのために、①他の博物館施設の視察調査、②展示評価、③展示候補物のリスト化を、設計業者からの受託業務として行った。 (3) 平城宮跡展示館と既存の平城宮跡資料との役割分担を明確化した。	
	
調査報告書ならびに展示候補物リスト（抜粋）	
【実績値】 打合せ回数 10回 国土交通省地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所平城分室・展示に関する設計業者との打合せ 論文等数 1件 （参考値：業務受託提出資料） ①施設視察報告書 1式（41施設分） ②展示評価分析報告書 1式（アンケート調査952件、展示評価のためのインタビュー調査10回、行動観察調査4回、フォーカスグループインタビュー2回の成果を反映） ③展示候補物リスト 1式（225件分）	
【備考】 (2) 調査成果の掲載「平城宮跡資料館における展示評価調査と都城関連展示の現状と課題」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6(予定)	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6414

自己点検評価調査

研No.80

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：平成 27 年から始まる実施設計への備えとして適切な時期に、視察調査・展示評価を行うことができた。 発展性：これまでにを行った協議ならびに作成し、国土交通省に提出した資料は、国交省の今後の事業の進展に大いに寄与するものである。 効率性：派遣職員を雇用し、業務の効率化を図った。						

2. 定量的評価

観点	打合せ回数	論文等数				
判定	A	A				
判定理由 打合せ回数：前年に増して、国土交通省地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所平城分室・展示に関する設計業者との綿密な打合せをすることに努め、必要な内容確認、情報提供を行うことができた。 論文等数：今年度公表が必要な 1 件の事業について公表ができる予定である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展示評価や視察調査の成果を反映した基本設計見直し新案を作成することができ、平成 27 年度の実施設計に向けて大きく前進した。次年度は、新案を一層吟味して改良するとともに、実施設計に向けて内容を詰める作業を行う必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り進んでいるため、順調と判定した。

業務実績書

研No.81

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティア事業の実施 ((4) -②)		
【事業概要】 平城宮跡への来訪者に奈良文化財研究所の調査研究成果を発信するとともに、平城宮跡の歴史や文化財に対する理解を深めてもらうため、平城宮跡資料館や遺構展示館、東院庭園、朱雀門、第一次大極殿の復原建物等の案内・解説を行う平城宮跡解説ボランティアの運営を実施する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成
【スタッフ】 加藤真二(展示企画室長)、中川あや(企画展示室研究員)、渡邊淳子(展示企画室アソシエイトフェロー)、松本正典(連携推進課課長補佐)			
【主な成果】 高い知識に基づく解説をより多くの来訪者に効率よく行い、文化財への理解を大いに広げることができた。			
【年度実績概要】 ・定点解説のほか、予約及び当日受付した来場者を対象に「ツアーガイド」として宮跡内散策に同行し解説を行った。 ・活動者に対しては、奈良文化財研究所が主催する専門研修及び他機関の文化財に関するボランティアガイドが解説する場に赴き臨地研修を実施した。 ・活動拠点でもある平城宮跡資料館において、企画する展示ごとに展示趣旨の解説を、その都度研究所研究員によって実施した。			
  平城宮跡解説ボランティアによるガイド風景			
【実績値】 ・平城宮跡解説ボランティア登録数：155名 〈参考値〉 ・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：90,259人 ・解説活動日数 307日 ・解説活動数延べ 3,984人(1日あたり13人) ・ボランティアに対する学習会等回数 平城宮跡資料館夏期企画展示研修 1回 〃 秋期特別展示研修 3回 講演形式専門研修 1回 臨地ガイド研修 1回			
【備考】			

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：来訪者の様々な知識需要・必要性に対し、その場にて十分な対応ができた。 発展性：多種多様な層の来訪者へ解説ができ、その反響は大きかった。 効率性：解説に係る時間的・人的投資は効率よくできた。 継続性：年間を通して、とぎれず継続した解説者の配置を行うことができた。 正確性：研修で得た知識・経験を基に正確な情報を伝えることができた。						

2. 定量的評価

観点	ボランティア登録数					
判定	A					
判定理由 ボランティア登録数：ガイドに必要な人数を十分に満たしている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ガイドに必要なボランティアを確保することができた。また登録ボランティアに対し講習等を行うことで、来訪者に対し文化財の理解を広めることに大きく貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	解説するボランティアへの学習・研修機会を提供し、そのレベル向上につなげ、広報による解説受講者数の増加を図ることなど、ボランティア運営の積極的な実施がきたと考える。 今後もこのペースを維持し、奈良文化財研究所の情報発信、さらには平城宮跡の公開活用につながるよう力を注ぎたい。

業務実績書

研No.82

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平城宮跡防災・防犯パトロール「平城宮跡みまもり隊」への参加((4)－③)		
【事業概要】 平城宮跡内でのマナー向上や防災・防犯に関して、平城宮跡みまもり隊へ参加することにより、平城宮跡内でのマナー向上や防災・防犯に寄与する。			
【担当部課】	研究支援推進部研究支援課	【プロジェクト責任者】	研究支援課長 今西康益
【スタッフ】 江川 正（宮跡等活用支援係長）、三本松俊徳（宮跡等活用支援係係員）			
【主な成果】 平城宮跡来訪者に平城宮跡内でのマナーの向上や防災・防犯活動を行っていることを理解してもらうことができた。			
【年度実績概要】 平日は平城宮跡内を巡回し、火災や宮跡内にある看板等の毀損予防のパトロール活動を行った。月1回の土日のボランティア活動では、平城宮跡来訪者に防犯メッセージが書かれたティッシュペーパーの配布や声かけを行い、マナー向上や防災・防犯意識を高める活動を行う等、事務局として連絡調整を行った。 年1回、文化庁平城宮跡管理事務所、国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所平城分室、奈良県、奈良市、所轄警察署及び所轄消防署の行政機関やNPO法人平城宮跡サポートネットワークによる連絡会議を開催しパトロール活動の報告を行った。			
			
平城宮跡みまもり隊出発準備風景			
【実績値】			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6431

自己点検評価調査

研No.82

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：市民ボランティアと共に活動を行った。 発展性：参加者はみまもり隊員に加え一般市民も加わることもあった。 継続性：計画に従って活動を行い、継続的な社会還元が出来た。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
判定理由						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮跡内の問題事項等について、文化庁平城宮跡管理事務所、国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所平城分室、奈良県、奈良市、所轄警察署及び所轄消防署の行政機関や NPO 法人平城宮跡サポートネットワークと協力して問題解決に尽力した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平城宮跡のパトロールを行い宮跡内の来訪者の安全・安心に寄与した。 今後も宮跡のパトロールを行い宮跡内の問題事項等の検証を行い、それを行政機関や NPO 法人平城宮跡サポートネットワークにフィードバックして来訪者の安全・安心に努めたい。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	NPO法人等への支援 ((4) - ④)		
【事業概要】 平城宮跡で活動しようとする各種ボランティア、また文化財関係のボランティアに対して要請があれば、奈良文化財研究所施設を活動の場所として提供することや、文化財に関する学習会等への講師の派遣を行う等の支援を行い、ボランティア団体の育成に寄与する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成
【スタッフ】 松本正典(連携推進課課長補佐)			
【主な成果】 ボランティア団体への支援は、その育成につながった。 平成 25 年度文化庁長官表彰において、特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワークが選ばれた。			
【年度実績概要】 ・「特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワーク」に対して、活動場所、講師の派遣、資料の提供など、積極的な活動支援を行った。 ・「子ども歴史教室」を共催で実施するとともに、「平城宮跡歴史講座」、「遺跡見学会」、「平城宮跡探検隊」を後援し、年間を通して連続した支援ができた。			
			
子ども歴史教室〈拓本づくり〉		平城宮跡探検隊〈どんぐり拾い〉	
【実績値】 (参考値) 奈良文化財研究所が支援し、ボランティアが実施した主な事業名称、回数、活動場所、従事ボランティア数、参加者数 子ども歴史教室 3回開催、平城宮跡資料館講堂・平城宮跡内、ボランティア延べ22名、参加者数32名 平城宮跡歴史講座(講演会) 3回開催、平城宮跡資料館講堂、ボランティア延べ45名、参加者数542名 遺跡見学会 2回開催、ボランティア延べ10名、参加者数18名(講師派遣) 平城宮跡探検隊 1回開催 平城宮跡内、ボランティア延べ13名、参加者数65名 「萬葉集」勉強会 12回開催、平城宮跡資料館小講堂、ボランティア延べ207名、参加者数延べ219名 「続日本紀」読書会 12回開催、平城宮跡資料館小講堂、ボランティア延べ181名、参加者数延べ181名			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6441

自己点検評価調査

研No.83

1. 定性的評価

観点	継続性	発展性	効率性			
判定	A	A	A			
判定理由 継続性：支援事業は、継続的に実施された。 効率性：奈良文化財研究所の施設を有効かつ効果的に使用し、参加者への広報・成果発表につながった。 発展性：子供達等の将来につながる好影響のある体験学習が実施された。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
判定理由						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	子ども歴史教室、平城宮跡探検隊、平城宮跡歴史文化講座等への講師派遣、活動場所提供等の支援を行い、活動の活性化に貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ボランティア団体の活動要請に対し、積極的に支援し、各事業が行われた。 今後も各種ボランティア育成に寄与していきたい